

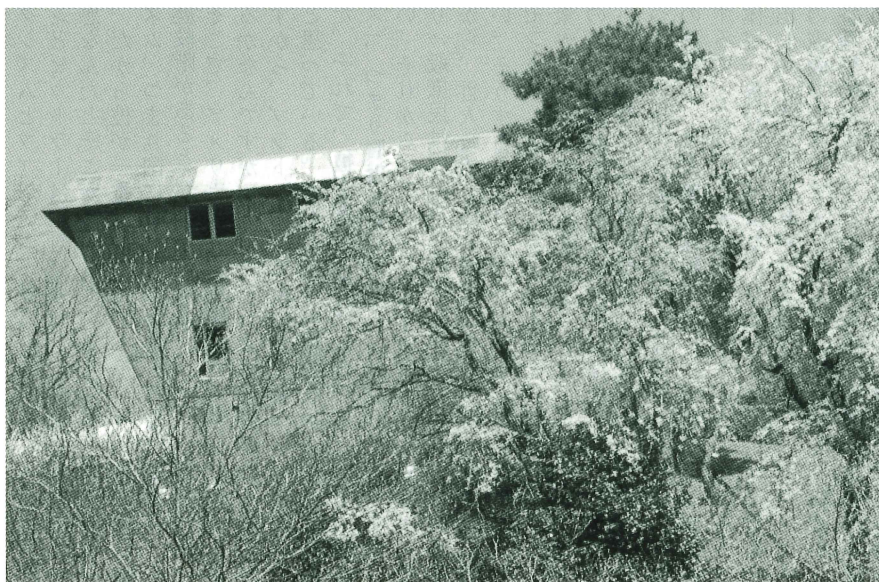
SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス

No.166
2003.7~2003.12

◆ハウス主催セミナー特別講演／基調講演より

- ◇現下の国際情勢と日本外交岡崎久彦 2
 - ◇共に生きるために—グローバル化時代の「食」と「農」田坂興亜 4
 - ◇日本の食卓の変遷熊倉功夫 5
 - ◇教員の教育力を高める原 康夫 6
 - ◇大学改革と職員のか板東久美子 7
 - ◇朝のように清々しく、そして半歩斜め前関根秀和 8
 - ◇教壇に立つこと以外は全部できる職員に松坂浩史 8
 - ◇今、大学の内外で何が起きているのか本間政雄 9
 - ◇国立大学法人化—変わる国立大学、変わる大学行政杉野 剛 10
 - ◇イコール・フッティングのあり方を探る日塔喜一 10
- ◆平成15年度主催セミナー事業報告 12
 - ◆法人ニュース/募金報告15
 - ◆ご利用状況 18
 - ◆平成16年度教員・職員セミナー開催予告20
 - ◆ハウスを利用して 14
 - ◆千人会通信 16
 - ◆ようこそ、マレーシア留学生71名の皆さん！ 19
 - ◆館長室から20



毎年4月になると、枝垂れ桜や八重桜が次々と咲きはじめ、この緑豊かな丘を彩ります。
みなさまのお越しをお待ち申し上げます。



Plain living and high thinking

財団法人 大学セミナー・ハウス
INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.
www.seminarhouse.or.jp

現下の国際情勢と日本外交

岡崎 久彦（おがき ひさひこ）
NPO法人岡崎研究所理事長・所長

私は講演をお引き受ける時、いつも演題を「現下の国際情勢と日本外交」と決めているんです。国際情勢というのはその日にならないとわからないものなので、こういう題にして一番新しいお話をすることにしています。今回のセミナーのテーマは「アメリカのリーダーシップと抵抗する世界」、これは面白い題ですね。私は抵抗しないものですから。私は賛成ですから。その話も後でしますが、これは面白い話です。

ネオコンとは

まずアメリカの現在の傾向からお話をしたいと思います。私は11月にネオコンの会議に出席するため、アメリカに行ってきた。ネオコンの中心になっているシンクタンクはPNAC (Project for New American Century) という小さな組織です。ビル・クリストル、ゲリー・フィッシャーらがいます。そこでセミナーがあり、呼ばれて行ってきました。

ネオコン（ネオ・コンサーバティブII 米新保守派）については、かなり誤解があると思いますので、このようなintellectualな会ですから、少し説明をしたいと思います。ネオコンの定義というのは難しく、今でもアメリカの論説で毎月一つか二つ、「ネオコンとは何か」という論文が出ます。ネオコンの思想は今のブッシュ政権の思想に非常に強い影響力を持っています。ブッシュの政策に対しては内外いろいろな批判もあるので、あの人はネオコンだとか、あの人はネオコンでないとか大変やかましいことになっていま

す。どこが難しいかと言うと、ネオコンには歴史があり、最近保守になってきているという話だからです。

純粋にネオコンと言われて、どこからも文句がでないのはビル・クリストルです。その父親であるアービング・クリストル、この人はもう全くのネオコンです。ネオコンの定義や誰がネオコンかということについては議論がありますが、ネオコンの来歴については誰も異存がありません。ネオコンが伝統的な保守と違うのは、それがリベラリズムに失望した元民主党リベラルだということです。1970年代始めのことですが、ベトナム反戦運動、学園紛争、それからヒッピーとか、アメリカの社会が大変乱れた時代でした。そういう当時のアメリカの風潮に反発した、それが一つ。それから70年代半ば頃のデータ時代。冷戦の実態を無視し、ソ連の軍事拡張をもたらした、安易なデタント政策に対する疑念、反発がその出発点にあります。ワシントン州の有名な上院議員ヘンリー・ジャクソンや学者・評論家ではアービング・クリストルらが中心ですが、そういう人たちが民主党を離れて、80年代のレーガン政権を支える勢力となったのです。ですから、今でもネオコンって何だと言うと「あー、あれはレーガン主義者だな」と言う人もいます。それが発生です。

ネオコンの思想的背景

そこでもう一つ、そういう人たちが哲学として、レオ・シュトラウスという人の哲学に傾倒したということがあるのです。このシュトラウスという人はユダヤ系ドイツ人で、ギリシャ哲学の大家です。ナチスに追われて逃げて、アメリカに亡命した。シカゴ大学で哲学の先生をしたのですが、人によっては20世紀最大の哲学者の一人だと言う人もいます。どうい

う哲学かと言いますと、簡単にまとめてしまおうと叱られるのですが、ビル・クリストルが書いた論文から引用しますと、レオ・シュトラウスが言っているのはテラニー（専制）というものは悪なんだ、自由と民主主義は天賦の権利（自然権）であり、正しいんだということです。マルクイズムとファシズム、特に、スターリンとヒットラーは絶対に悪だと、専制は悪なんだとそこから発しているんですね。だから彼が一番嫌うのは、レラテイビズム、つまり国によってはいろいろな発展段階があるという考え方です。

そこで、アメリカの民主主義をどう考えるかなんですが、彼はギリシャ哲学者ですから、プラトンの哲人政治が一番いいと思ってる。ただ一度も実現しなかった。それで、彼が考えたのは、「ザ・ワイズ」、つまり賢者は統治しようとは思わない。それから、「ジ・アンワイズ」、つまり一般庶民は統治されたいと思わない。だから、哲人政治というのはうまくいかない。そうすると「ワイズドム」と「コンセント」、つまり「正しい考え」と「一般大衆がこれを「受諾する」ということ、その二つが両立する政治でなければならぬ。そうなる、彼が言っているのは一つの国を造った非常に賢い立法者と、その法律を一般大衆が強制でなしに「納得する」、それがいいだろうと、そういう政体が一番いいのではないかと、そういう論を出しています。それがつまり、アメリカの憲政であり、アメリカの民主政治が一番理想的なんだ、というのが彼の哲学なんです。ですから、これが極めて単純なアメリカのやることは何でもいんだというアメリカ信奉主義と紙一重です。同じものと言ってもいいんですが、その裏にある哲学が随分違うのです。

今度その哲学を国際政治にどういう風に適用するかという話をしましょう。ア

ービング・クリストルによれば、国際政治において特別な原則はない、歴史から学んだアテイチュードがあるだけなんだ、と言っています。つまり「ツキジデス」などから学んだ歴史の知恵ですね。最近アービング・クリストルが「ツキジデス」から学んだ原則をいくつか書いています。一つは愛国主義というのは正しい事である。第二が世界政府というのは専制に導く恐れのある危険な思想であり、第三に政治家は敵と見方を峻別すべきであり、第四に、これが特に意味があるのですが、大国にとっては国益はその領域内の問題に留まらない、小さい国の国益は境界線で止まるが、大きい国はそういうわけにいかないんだというわけです。そのようなことは別に現実主義ではなく、歴史から学べばもう当然のことなのだという議論ですね。もう皆さんお分かりだと思いますが、今のネオコンの考えというのがすぐ出てきますよね。複雑な話を省いて、歴史的に言えば、今言ったのがネオコンなんです。

ネオコンの思想とイラク政策

そこで、今度はイラクとの関連で言いますと、ネオコンの思想がアメリカのブッシュ政権の政策の中心になっています。いつが契機かと言いますと、はっきりしているのは今年の2月26日です。ブッシュが共和党の本拠地、アメリカン・エンタープライズ・インスティテュート(AEI)で講演をしているんです。イラクに対する最後通牒が3月18日、戦争が始まるのが3月20日ですから、イラク戦争の直前ですね。戦争目的なども全部掲げているのですが、ネオコンの考えている中東政策が、ブッシュ政権の中枢の政策になっているのです。その政策とは、まずサダム・フセインの悪政から人民を解放し、それからパレスチナに平和共存を達成す

る。それから中東全部、そこに自由・民主主義の旗を掲げるんだ。これは3月18日の最後通牒にも反映されています。あれは本当に奇怪なる最後通牒でしたね。あんなの見たことないですね。最後通牒というのは普通相手の政府に対して、これとこれをやれと。さもなければ48時間以内に攻撃するぞ。それが最後通牒です。あの最後通牒は48時間の期限を切っています。その内容はサダム・フセイン親子に行け、というものでした。大量破壊兵器を放棄しろとか、テロリスト支援を止めろということとは条件ではない。その二つをやめたら助けてやるということではないんですね。大量破壊兵器という話は、それまでの一種情勢判断とかスローガンというか同盟国の説得には使っていますが、戦争目的は、イラクをサダム・フセインから解放することなんです。こんなのは近代に例がないと思います。

最近のアメリカで、きちんと読んでおいた方がいいと思われるのが、6月24日の演説。それから今年の2月26日の演説。それからつい最近の11月6日の演説です。民主主義協会 (National Endowment for Democracy) の20周年記念で、ブッシュがやった演説ですが、これが正に自由と民主主義だけに絞った大演説なのです。これに今のアメリカの思想が全部入っています。この中で言っているのは、世界中どこでも民主主義を支持するんだ、そして中東については、まずイラクを民主化して、その後はできたら中東を全部民主化するんだと、そういう勢いです。それを forward strategy for democracy という政策で謳っています。

これでネオコンというものはどういうものであるか、ネオコンの考え方、歴史的背景、それがブッシュ政権にどういうふうな反映されているか、大体お分かりただけだと思います。

北朝鮮問題の見通し

それでは、時事の問題に入りたいと思います。イラク問題に入る前に北朝鮮問題を片付けた方が話の順序としていいので、北朝鮮問題の方を先にお話します。

北朝鮮については、私は判断を間違えました。私は今年の3月頃までは、イラク戦争が終わったらすぐ北朝鮮、と思ったのです。ところがアメリカはイラク戦争にかかって北朝鮮を放置している。私がかつてアメリカはいよいよ何もする気がないと思ったのは、5月31日のポール・ウォルフォウィッツ (国防副長官) の演説を聞いてからです。ISS (ロンドンの国際戦略研究所) の年次総会がシンガポールであり、そこで演説をしたのです。世界で一番権威が高い会議でウォルフォウィッツがアジア政策を議論するというので、注意して聞いていたのですが、始めの方はイラクの話をして、これはもう戦争に勝ったばかりで、まだテロなんか起こっていない時ですから、自信満々で格調も高いし、立派な演説なのですが、それがアジアの話になると、アジアは歴史上最も平和な地域だ、と言っています。そして、北朝鮮のところに来て、唯一の解決策は鄧小平風の改革開放路線をすることだ、と。これはアメリカの戦略にならないですよ。さすがに当面の核開発はどうするんだという質問が出ました。それに対して、ウォルフォウィッツは、それは大変な問題だ、アメリカは、北朝鮮の核が外国に洩れることを心配していると、それしか言わない。それを聞いて、アメリカは何もする気がないということに確信を持ちました。

私は、アメリカの評論ではペリー元国防長官とほとんど同じ意見でした。今年の春から夏までの間、アメリカのいろいろな新聞、論説で、北朝鮮政策をしっか

り論じた論文というのはペリー氏のもの唯一です。彼は「もう黙っていられない。こんな放っておいたら、北朝鮮が核開発してしまう、そうすると、どうしても戦争になる。だから危機が近づいている」ということを6月に書いています。私も彼も、交渉さえすれば解決すると思っていたのです。どうしてかと言いますと、彼は1994年のあの米朝交渉、それから99年の米朝交渉、両方とも当事者なんです。94年も99年も米朝間の交渉は成立しているんです。その成立する背景が、現在もほとんど変わっていない。

第一は、北朝鮮の軍事能力です。休戦ラインの北側に八千本から一万本といわれる大砲ロケットがソウルを射程にとらえて並んでいる。軍事のオプションがないので、妥協しかない。もう一つの基礎的条件は、北朝鮮がいかにお金がないということ。油もないし、食料もないし、油もなし、何もなし。99年の交渉は始めから見えていたのですが、始まった途端にまとまると思った。というのは、北朝鮮側が言っているのは食物の話ばかりですから。だからあれは数字で値切り合っただけで、もうまとまる話なんです。

ペリーさんは座視できない、大変だと言いつづけていますが、私はアメリカはやる気はないと思つています。アメリカがもう戦争する気がないという理由としては、やはり、イラクが片付くまで無理だろうと。北朝鮮の問題をブッシュさんの机の上上げられないようです。そうでしょうね。ということ、北朝鮮の問題は先です。抑止力だけは効かしておいて、北朝鮮問題がどうなるかということ、これはイラク問題の関数ですね。

イラク問題の見通し

イラク問題の見通しですが、これは非常に単純明快になって来ました。今年の夏からもう何十回もアメリカの首脳が言っていることですが、アメリカは引かないです。テロに脅迫されて引くということはない。勝つまでやるということ、私、どこかでアメリカは死地に入ると書きましたが、それはあの孫子の第11章にある言葉なんです。死地というのは、必ず死ぬ土地という意味ではありません。勝つしか方法がない、ほかにどういう方法もない場所が死地なんです。死地に入らなければ孫子の兵法から言えば、もつての外なんです。そんなところに入っちゃいけないんです。ところがそれが孫子の懐の広いところ、死地に入ったら、そこでみんなが締まって、また勝つチャンスが出てくる。呉越同舟という格言はそこに書いてある言葉です。アメリカは勝つしかない。そうすると、これ、見通しは非常に単純で、やはり勝つでしょうね。唯一の条件は世論です。世論が引くと言ったらアメリカの負けです。ところが、アメリカの世論が今、引くという世論が皆無です。政治家で戦争に批判しているのはデイン一人ですが、デインだって引くとは言っていない。極めて単純明快なる見通しになって、世論の動向さえ見ればばいいという形になってきましたね。アメリカの世論が動かない限りは、もうびくともしない。そういうことをアメリカはこれからやっていくということです。

(2003年11月22日、第30回国際学生セミナー基調講演より。文責・編集部)

共に生きるために

グローバル化時代の「食」と「農」

田坂興亜 (たさか こうあ)

準学校法人 アジア学院校長

昨年ヘッドハンティングに遭い、国際キリスト教大学を辞めて、栃木県にあるアジア農村指導者養成専門学校、アジア学院に移りました。今日はそこでやっていることなどもビデオやスライドで紹介しながらお話を進めたいと思います。

危機に立つ食の安全

最初に、食の安全を巡ることを少し扱いたいと思います。昨年、中国から輸入している野菜が農薬によって汚染されているという大きな話題になりました。特に問題になったのは冷凍物のほうれん草ですが、フェンバレート(スミサイジン)という、いわゆる環境ホルモン疑いがある農薬や、クロルピリフォス、ジクロロボス、メタミドフォスなどが検出されました。アジア各国では日本ではもう既に禁止されたような農薬が現在も使われています。日本で30年前に禁止された農薬が堂々と政府の農業資材市場で売られているというようなことがあつたのです。これらの国からの輸入品はよほどきちんと検査をしないと、食べた後で汚染に気づくなどということになってしまいます。

輸入食品の中でも一つ大きな問題は欧米、特にアメリカから輸入される穀物にポスト・ハーベストという形で、マラチオンやスミチオンという有機リン系の農薬が混じっていることです。このポスト・ハーベストというのは船で運んでくる間に虫がつかないように、収穫後に農薬を混ぜ込む方法です。急性毒性は低く

とも、視力低下や化学物質過敏症を引き起こします。また環境ホルモンとしての危険性も孕んでいます。日本は小麦粉の90%を輸入していますが、これらの農薬は、給食のパンなどを汚染しています。厚生省は91年末に、従来、米に対して定めていた基準の50〜80倍も甘い残留基準を小麦に対して設定しました。今も10ppmとか8ppm以下であれば、合法的にほとんど日本に輸入されているという状態が続いているわけですね。

環境ホルモンと言われているものは、もともとは内分泌攪乱物質というのが正式な名前で、ホルモンのまねをして働いてしまう偽ホルモンのことなのですが、非常に深刻な問題を私たちの世代に突きつけています。1996年に出版された『Our Stolen Future』(邦訳『奪われし未来』)の著者の一人、シリア・コルボーンさんが日本で講演をされた時、一番訴えていたのは多発する生殖異常ということでした。男子の精子が減少したり、女子に子宮内膜炎という病気が増えたりして、子供が産めなくなる現象が起きています。二番目は免疫機能の障害、そして三番目の問題は、これはまだ議論があるところなんです。多動症(無闇やたらと動く症状)とか知的障害などです。遺伝子組み換えを含め、現在は「安全ですよ」、と言われているあらゆるものが、もう一回そのような目で見直される必要が出て来ていると思います。

飢えと飽食

次に、飢えと飽食という問題に入ります。2002年度のFAO(国連食料農業機関)の統計では世界で八億一千五百万人の人たちが栄養失調や飢餓に直面していると言われています。他方、例えば日本では給食で出された食べ物の二割以上が捨てられているという現状があります。ア

ジア学院では、近所の学校から給食の残飯をもらってきて、豚の餌に使っています。日本では年間に捨てられる食料が、低く見積って600万トン(日本が輸入している小麦の量にほぼ匹敵する量、多く見積って一千万トン(日本の年間の米の消費量)です。またこれらの食べ残しが焼却炉で燃やされる時にダイオキシンを発生させる原因になっているのです。こういう点で、私たちは現在の食生活を徹底的に見直す必要があるだろうと思います。

飢えの問題への技術的対応とその問題点

飢えは、人口増加に食糧増産が追い付かないから起こると一般的には考えられています。そして、飢えをなくすためには貧しい国における人口抑制と科学的農法の導入による食糧増産が必要だと考えられてきました。「緑の革命」は食糧増産という考えに立つて始められたもので、その発信基地はフィリピンのマニラ近郊にある国際稲作研究所です。今から40年前にアメリカのフォード財団、ロックフェラー財団、そしてアメリカ政府の出資によって設立されました。化学肥料と農薬の使用を伴う多収穫品種を導入しましたが、短期的には大成功したものの、長期的には貧富の差を拡大して、貧しい人々の飢えを解決できませんでした。

また、日本政府による「食糧増産援助」は、アジア・アフリカの貧しい国々に農薬や化学肥料を送り続けてきましたが、過剰に送った農薬が使われぬまま、環境汚染を起こしているとFAOは指摘しています。私たちNGOは日本政府に対し、援助が本当に飢えをなくすのに役立つような方法(環境保全型の技術協力)で行なわれるべきだと働きかけており、外務省と会合を重ねています。

飢えからの解放をめざそう

最後に、それでは農薬なしの農業が可能なのか、食料生産が可能なのか、と言いますと、答えはいエスです。ここに持つてきましたが、南の方の国にはニームという、こんな木の葉っぱがあります。このニームという木を田んぼの周りに植えておくと、この葉っぱが落ちて、水の中につきり、その成分が中に入っていると、虫が寄りつかないですね。このように、ただで入手できるものを使って、虫を防ぐ、菌を防ぐ、そして肥料、化学肥料や農薬を購入する代わりに、堆肥を作るという形で米が十分に生産ができるのです。まさに今言われている有機農業ですね。ミヤンマー、タイ、ベトナムなどで盛んに行なわれはじめています。

アジア学院では食堂から出てくる生ゴミは全部堆肥にして循環をしています。それから、合鴨農法といって、除草剤を使わないで合鴨に虫や雑草を取ってもらうというやり方を試んでいます。

このように、アジア学院では、アジア・アフリカ各国からの研修生が飢えのない公正な社会を目指して、有機農法に基づいた持続的農業に取り組み、また、生産した食べ物を分かち合っているのです。

(2003年11月8日、第189回大学共同セミナー基調講演より。文責・編集部)

日本の食卓の変遷

熊倉功夫 くまくら いさお

国立民族学博物館教授

食文化ということが、今大きな話題、興味の対象になってきております。実は食文化という言葉ができたのは最近のことです。昔はそんなことを言う人は誰もいませんでした。食べ物が付加されている様々な価値、文化が注目されるようになったということでしょう。私たちは今飽食の時代に生きていますが、私が子供の頃は、まだ「飢え」というものがありました。雪が降ってくる、その雪が砂糖だったらいいな、なんて思うことがあったわけですね。ついでに、我々自身が生きているか死ぬかという飢餓を感じていたのです。ということは、後10年経ったから、そういうことが起こらないという保証はないという話で、そのような中で、我々日本人はどのような食べ方をしていたかという話をしたいと思います。

近代日本の食生活の変遷

日本の近代の食生活は大きな変化を遂げてきました。食卓ということでは話しますと、「銘々膳」から「ちゃぶ台」へ、そして「ダイニング・テーブル」へと、日本は近代百年の間に三種類の食卓を経験してきました。世界的に見ても珍しいことです。

銘々膳というのは、一人ひとりがお膳を持っている形で、箱膳が一般的でした。箱膳とはただの箱で、蓋をひっくり返すと、お膳に早変わりします。中に飯碗と汁碗と小皿、そして箸が入っています。つまりポータブルな食卓ですね。日本人の食卓では明治時代までこれが普通でした。弥生時代から日本人は一人ずつのお膳でご飯を食べてきました。平安時代の貴族が中国式にテーブルで食べていたという例もありますが、基本的には日本人は一人ずつのお膳だったのです。そして、その中心は箱膳でした。これが大正の終わり頃急激に減少します。代わって、ちゃぶ台が増えてきて、箱膳を凌駕します。戦前から戦後にかけては、ちゃぶ台の時代であります。このちゃぶ台が1965年前後にまた急激に減って、今度はダイニング・テーブルが増えてきました。東京オリンピック、70年万博の頃、日本の生活はがらりと変わっていきます。

食生活の変遷と日本の社会・文化

なぜ、このような変化が起こったのかと言いますと、これは明らかに家族の問題であり、食文化の問題であります。

そもそも日本人は食器というものに対して個人所有という意識が非常に強かったのです。伝統的な生活の中で、日本人は唇の触れるものに対し、非常に潔癖でした。今も残っている結婚式の三々九度というのは、親類縁者の前で初めて唇を共にすることで夫婦として認められるわけですが、唇というのはそういう意味を持つていたのです。そのような文化を厳密に箱膳という形で守ってきました。

ところがこの箱膳に代わって、明治20年代ぐらいいからちゃぶ台というのができて、明治の終わりから大正にかけて、都市を中心に広がっていきます。その理由は何かと言いますと、衛生なものです。衛生というのは近代をリードした重要な思想だと思います。箱膳の食器というのは毎回洗いません。食器に最後にお湯を注ぎ、そのお湯も飲んでしまつて、中のふきんで拭いて、そのまましまつておくのです。そして、三日とか四日ごとに洗うわけですね。これは主婦というものがいなかったからです。一人ひとり自分で

自分のことは始末するという時代です。また、洗うということが非常に難しいことでした。今のようにならなくても蛇口をひねれば必要に応じて水が出てくるわけではありませんでした。近代は人間に大変な便利さを与えてくれたわけですね。

このちゃぶ台時代になりまして、都市部において勤労者階級が生まれ、専業主婦が増えていきます。ちゃぶ台時代にはいろいろな変化が起きます。まず第一に「いただきます」「ご馳走様」を言うようになりまして。箱膳時代は自分の家で仕事をすることが多かったわけですから手が空いた者から食べ、終わればすぐ立つて仕事に行く、というような環境です。

と取り、「いただきます」と言つて箸をとり、一斉に「ご馳走様」と言つて終わるといふ必然性がなかったのです。箱膳時代には食事中のしつけというものもは緩やかだつたと思います。ちゃぶ台時代になりますと、食卓がしつけの場になります。非常に厳しなしつけの場です。父親の説教もありましたので、食卓は緊張していました。貧しいながらも楽しい我が家とか小さなちゃぶ台を囲んで家族が楽しく談笑しながらご飯を食べるといふイメージは嘘です。しかし、理想としての「一家団欒」「食卓の風景」というものはありました。堺利彦が明治36年に『家庭の新風味』という興味深い本を書いて

います。高度経済成長の中でダイニング・テーブルに変わりましたが、これも衛生が一つの理由ですね。寝食分離ということですね。ダイニング・テーブルが出てきて、作り付けのテーブルと椅子でご飯を食べるようになります。この時に一気に食卓のマナーは崩壊します。まず第一に食卓で一人うるさかった父親が食卓からいなくなるわけですね。高度経済成長で企業戦士と呼ばれて、夕食の時間に父親が帰

って来ないわけですから。そしてみんなよくしゃべるようになります。テレビまでしゃべるようになる。日本人は音というものに対して意外と鈍感なんですね。こういう中で、食事の中心はどうなつたかと言いますと、飛躍的に豊かになるんです。飽食時代の到来です。ちゃぶ台の時代に何を食べていたかというところ、あまり変わったものは食べていなかった。一週間に一度か二度、魚が夕御飯につく、朝御飯は大体煮ころがしとみそ汁とご飯という位のもので、大盛りの皿というのが出てくるのは、ダイニング・テーブルになってからです。

文化継承の場としての食卓

そこで、今我々は食卓というものに何を期待していくのかということになります。改めて団欒という言葉が食卓に求められて来ているように思います。

ちゃぶ台には必ずしも団欒がなかったと言いましたが、食卓に団欒がなかったということ、食後というものが昔は非常に長かつたんですね。囲炉裏端などで、食後の一時の団欒があつたわけですね。

やはり食事に一斉に皆が集まつてくるということ、非常に大事なことであり、これも、人間と人間を結びつける非常に重要なコミュニケーションであります。今もう一度、ダイニング・テーブルでもいいんですが、一家団欒というものを食卓の中に活かすならば、そういう中で日本のマナーの根底にある「間」というものを学ぶ場が生まれるのではないかと考えます。もう一度、家庭の中で食卓の団欒というものが復活できないかと考えているわけでありませぬ。

(2003年11月8日、第189回大学共同セミナー基調講演より。文責・編集部)

教員の教育力を高める

原 康夫 (はら やすお)

帝京平成大学教授、元筑波大学副学長

はじめに

大学改革の動きの中で、教育内容や教育方法の改善が目ざされておられ、また大学教育の大衆化や初等中等教育の変化の中で、学生の学力低下や学習意欲の減退が指摘されています。選ばれた人材に高邁な学問を授ければよかつたエリート教育時代は終わりました。大学教員は学生の多様化に対応した教育内容や教え方の工夫に格段の精力を注ぎ、大学教育の質を維持する努力を求められています。

学生にとって必要な教育とは何か、どのように教えればよいのか。私はまず、大学の教員と教育組織は学生の到達目標を設定するように努力して、*What to teach? How to teach?*を明確にする必要があると思います。その上で学生が自ら積極的に学ぶように仕向ける必要が不可欠であると思います。

教育に関する普遍的な法則

そこで、まず教育に関する普遍的な原理ですが、私の経験では一番重要な法則は「*Nothing is good for everything. Nothing is good for everybody.*」だと思います。その次に、「*God helps them that help themselves.*」です。結局、生徒にしても学生にしても、やはり自分がやらなくては駄目なのだということを強く思いますね。

大学教育は高等普通教育か

専門は大学では無理だから大学院で教えて、大学は普通教育をしろという考え方がありますが、それは必ずしもよくない

です。学生は多くの教科を学ぶけれども、先生は一つの教科を、他の教科のことは無関係に教えるからです。内容を発展させなければいけないのですが、発展する方法は横方向(応用的)より、縦方向(より専門的方向)となってくるわけです。一教科しか教えない先生が共通的なことを教えていきますと、結局その分野の理論的な研究者の養成への蒸留過程というか選別過程化して、定型化してしまいます。I don't teach students. I teach physics—つまり私は物理の教科書を最初から最後まで教えればいいのであって、それを学生がわかってもわからなくても最後までやるのが商売である。でも、本当はそうではなくて、やはりI teach physics in the context of caring about studentsでなければならぬのです。つまり、多様化の必要が生じる。やはり高等普通教育といっても普通教育とは違った教育でなければならぬのではないのでしょうか。

学生の考える理想的教師像は？

いい先生というのは自分の教える教科内容をよく知っている先生だと思いますが、それをいう人は少ない。先生になつてから勉強すればいいとか、授業の前にやればいいのか、考えているようです。私は先生の指導力不足が今非常に問題だと思っています。

落ちこぼれの問題があります。教科書を三月までに終わらなければいけないから、わからない学生がいてもどんどん先まで行ってしまつて、どんどん落ちこぼれていく。すべての人に同じようにするという考えではうまくいきません。

日本では学校以外で勉強する時間が非常に短い。ほとんどの学生が「先生がわかりやすく授業をすれば、学生は教室の外で勉強しなくてもよい。家で勉強しなければならぬのは先生が悪い」と言い

ます。そういう学生に教員の評価をさせますと、自分達の方が悪いのに先生が悪いという判断をするわけです。学生が全然勉強しなくても英語ができるようになることはあり得ないことですから、あり得ないことをあり得ないことだとわからせるということが、まず教員評価をさせる上で絶対に必要だと思っています。学生の理想の教師像、打ち出の小槌みたいな先生がいればいいのですが、それは無理なのだと思います。

学習には推論能力、思考能力が必要

さて、学生にわかりやすく話せば、学生はわかるでしょうか。わかるとは限りません。その理由は、大学での教育内容を理解するには、理解するために必要な基礎能力、つまり「論理的思考能力」、「抽象能力」等が必要だからです。

また、初めて遭遇する新しい学問の理解、新しい言語の習得には、受動的学習ばかりではなく、有期間に「臨界量以上の能動的学習」を行なう必要があります。そして、物事は繰り返し教えないければいけないのです。身についた自律的行動の型を変化させる必要性もあります。一時間の教室内学習と二時間の教室外学習がセットになったコースを開発し、その実施を可能にする環境設定が重要です。

教養教育とは何か

学生が幅広く深い教養及び総合的な判断を培い、豊かな人間性を涵養するためには、その前に教師が「幅広く深い教養及び総合的な判断力を持つ」ことが必要で、これが「教師の教育力向上」の良い方策であると考えます。このために異なる専門分野の教師の学際的協力による教材開発を、教育組織の教育目標との関連で行なうのが実際的でしょう。教養を専門と切り離すことは全く意味がなく、医

者だったら信頼できる医者、弁護士なら何とかできる弁護士、それが教養ということだと思います。私は、カリキュラムは、専門教育を中心とする一体のものとして総合的に編成すべきだと考えます。

21世紀には、学際的な専門教育と生涯学習が不可欠になる。科学技術が日進月歩の時代であるからこそ、ホットな専門知識のみではなく、専門分野についての寿命の長い見方と学習能力を身につけさせる必要があると思います。国際的コミュニケーション能力もますます必要とされてくるでしょう。

終わりに

結論はやはり、出来ることと出来ないことがある。教師の教育力というのは高める必要があるけれども、高めるには限界がある。適切な学習目標を作つて、学生に自ら学ばせることが重要であつて、客観的な成績基準で評価する。学生に達成感を与えて感謝されるのが理想であります。そのためには教師も一生懸命頑張らなければならぬし、自分の方法が一番いいのだと思わないで、色々な「いい方法」を聞くことが必要ではないかと思っています。

各専門分野の教師集団が情報交換を行なえる場を設け、他大学での経験を学び、教育情報を共有し、可能な場合には教材を共有できることが、教師の教育力を高めるために必要です。

結語として、次の三つの言葉を繰り返します。

God helps them that help themselves.
Nothing is good for everybody.
Excellence & Diversity.

(2003年9月13日、第40回大学教員セミナー基調講演より。文責・編集部)

大学改革と職員の方

板東久美子（ほんとう くみこ）
文部科学省大臣官房人事課長

定点観測のように、十一、二年ごとに高等教育の仕事に携わって来たとおっしゃる板東課長。実務を通じて実感された時代の大きな変化を振り返り、その変化に対応する文科省の基本政策について説明された後、職員に対する熱いエールで講演を締め括られた。

社会からの批判Ⅱ期待

社会が大学に対して批判していることは、三点あるかと思いますが。第一点は、「教育」の面です。国際的に通用するような教育を行なっているのだろうか、教育に対して本当に力を入れてくれていたのだろうか、という不満です。第二点は、大学はどこも似たり寄ったりだねと。個性化、多様化というけれども、もともとそこは思い切ったそれだけの大学の強みというのがあるというのではないだろうか。第三点としては、社会に対する貢献、社会に対する関わりという意識が非常に弱いのではないか。このような点が大学に対して寄せられる社会からの批判、言い換えれば、「期待」だったと思います。

大学審議会／中教審の下での大学改革

大学は変わってこなかったのか、と申しますと、昭和62年に大学審議会がスタートし、その後統合されて中教審（中央教育審議会）大学分科会として、非常に活発に、大学のあり方、大学制度、大学行政について議論し、一つ一つ答申として出してきました。そして大学人も、行

政もそれを受け止め、色々な改革を推し進めてきたわけですが、改革の方向というのは大きく三つのキーワードにまとめることが出来ます。①一つは教育研究の高度化ということです。一番重要なポイントは大大学院を質量ともに飛躍的に充実させていこうということです。この十年で大大学院の数を倍増しました。質の点ではまだまだですが、少なくとも大大学院を飛躍的に充実していこうということで、この十数年の流れがあったわけです。教育研究の高度化という点では、研究に関して産学連携等も一つの柱であったかと思えます。②二つ目は高等教育の個性化、多様化ということです。平成三年に大学設置基準の大綱化が行なわれ、ほとんどソフトウェアに関する規制をなくしました。弾力化、柔軟化というものを活用して、大学がそれぞれの理念、目的に合わせた個性を大いに発揮していただき、多様化していただきたいというのが目的です。③三つ目は組織運営の活性化ということです。三点のなかで、一番変わっていないのが組織運営の活性化の面だったのではないのでしょうか。

遠山プラン—大学構造改革

このあたりのことをもつとスピード・アップしていかなければいけないということが出てきたのが、13年6月の所謂「遠山プラン」です。この構造改革の方針は大学改革の全体のように言われますが、これはごく一部分です。大学が教育・研究に関して、真に知恵を発揮していくための枠組み作り、基盤強化が大学構造改革であろうかと思えます。三点あります。①一つ目は国立大学の再編統合です。ねらいは教育研究基盤の強化です。国立大学だけではなく、公立大学にも大きく波及しています。②二つ目は国立大学の法人化です。法人化のポイントとしては、

国立大学は今までの行政機関の一部として位置付けられていたわけですが、むしろ大学の自立性、自主性というのを高めていくために、個々の大学が国から独立した法人格を持つという形にしていこうと。そして事前のチェックということを極力少なくしていき、大学が立てた計画に基づいて実績をあげているかどうかという評価を自動的に行ない、それに基づいて大学が新たな方向というものを更に打ち出し、大学の活性化を図っていくというわけです。③三つ目は第三者評価に基づく教育原理の導入ということです。その一つが21世紀COE（Center of Excellence）プログラムであり、特色ある教育を支援するためのCOL（Center of Learning）プログラムです。また、アメリカやイギリス等の経験からも学びつつ、行政ではなく、専門的な判断をしていく第三者評価機関というものを育てて、評価による大学の質の保証ということを重視した、新しいシステムを構築しつつあります。

今、職員に求められること

このような大学をめぐる環境の変化の中で、では職員に対して何が強く求められているのでしょうか。私は、第一に社会とのインターフェイスをしっかりと担っていただきたいと思っております。社会との関わりが重要視されていますが、例えば産学連携などにおいて、そのプレイヤーは教員であるわけですが、社会との接点のところをしっかりと担っていくのは職員だと思えます。今まで、「窓口の敷居が高くて……」というような声も聞こえてきました。中身が柔らかいのに、外の部分で固いというように、生卵の殻のようになってはいけないと思います。社会と大学とをうまくリンクさせていく、インターフェイスとして機能していかなくては

はいけないと思います。そのためには情報感度—アンテナを広く高く張って、社会や行政の動き、色々なニーズを敏感にキャッチし、それを教員やトップの側にうまく繋げていくことが必要です。積極的に外に出て行き、是非社会の中のプレッスを高める一つの尖兵となっていきたいと思えます。

これからは、色々なセクターなり、機関がそれぞれの特徴、強みを発揮しながら、取り組む時代だろうと思えます。一つのとこで色々な要素を備えるのは不可能です。最近の大学審議会でのキャッチフレーズは「競争的環境の中で、個性輝く大学」ということですが、それぞれが強み、個性を持つということ、そしてそれらが組んでいき、総体として大きな力を発揮していくという時代になろうかと思えます。大学の中でも教員と職員のパートナーシップが益々必要になってきます。そのコーディネートとしての役割を担っていただきたいと思うのです。何よりも原点として、職員は、大学が教育研究などで新しい試みをしたという場合、それを現実に実現していく力になってほしいと思えます。今までのように、「規則はこうなっています」というのではなく、どうやったらこの主旨、ねらいを実現できるだろうかと思慮を絞る、そういった「実現力」が非常に強く求められています。

職員の方々に日々の業務の中で大いに積極的に色々なチャレンジをしていただくということが、それぞれの大学のパフォーマンスを高めていく上で非常に大きな役割、大きな結果を生み出しているというのを申し上げて、話を終わらせていただきたいと思います。

（2003年7月5日、第6回大学職員セミナー特別講演より。文責・編集部）

朝のよみに清々しく、 そして半歩斜め前

関根秀和（せまね ひでかず）

大阪文學院短期大学学長、中央教育審議会委員

「大学危機回避―大学のミッション／教育／研究／社会貢献を明らかにする」と題する『主張』で、関根氏は詳細なレジメを基に、「選択の意識化」「組織機能の構造化」「Instituteの形成者として」の三つの視点について熱く語り語られた。印象的な最後の締めくくりの部分を再現する。

* * *

「朝のように、清々しく」、これが教育の世界に働く私たちの基本的な印象でなければならぬと思います。朝のようにいつも清々しくというのは、学生に対しても、社会人の人たちに對しても、あるいはティーチング・スタッフに對しても、ということですね。朝のように清々しくいられるということの一番中心は自己受容だと思えます。絶えず自分に失望し、自分の仕事に失望し、あるいは自分が置かれている状況に失望するということが続くわけですが、そういう中で、しかし本当に自分を受け入れていくことができるような、そういう精神的な基盤を持つことが大切です。そして、希望を決して捨てないことです。希望というのは持ち続けていけば、必ず「成る」と思います。私の人生の中で、今強く感じていることは希望を持ち続けることがどんなに大事かということですね。

もう一つは、「半歩、斜め前」。これは私の言葉ではなく、マルセ太郎さんという、一人芝居をずっとやってきた方の言葉です。残念ながら三年前に癌でお亡く

なりになりましたが。マルセ太郎さんの私の学校に呼んでですね、黒沢明監督の『生きる』を一人芝居で演じてもらったことがあるのです。ある公務員が胃癌にかかっているということがわかって、最後命尽きるまで公園を造っていくというその物語、志村喬がやったんですがね、みなさんもご存知でしょう。

芝居の後、学生たちと懇談もしてくれて、私とお茶を飲みながら話してくれて、こう言ったんですね。「先生ね、演劇というのはね、半歩、観客に対して半歩斜め前でないやだめなんだ」と。「一歩前を歩いたら観客はついて来ない。で、一歩後を歩いたら観客におもねることになる。横に並んだら、こつちから観客に伝えるメッセージがなくなる。だから、私たちは半歩斜め前でないやだめだ、半歩斜め前から観客にメッセージを語りかける、それが観客と演じる者との最も適当な距離だ」と彼は言うのです。僕はこの時、「あー、これは我々の仕事に通じるなあ」と思ったんですね。

本当に学生に対して横に並ぶ時はこれは学生相談なんですね。カウンセリングの時には完全に横に並んでやらなきゃいけない。三步も四歩も前へ進んで、学生に「こつちだ」と言えた時代はエリート教育の段階で、今日では距離がありすぎるわけですね。今のこのユニバーサル化された大学の状況の中で、我々にとって基本的な姿勢、特にマネジメント・スタッフとして、多角的な学生のいろんな、多角的な状況に接していく時に、我々ととって大事なのは「半歩、斜め前」という、そういうポジションではないかと思うわけですね。

教壇に立つこと以外は 全部でできる職員に

松坂浩史（まつさか ひろし）

金沢大学総務課長

教官と職員が一体となった組織、地域貢献推進室主任を兼任されている松坂課長。現在のような低減期に競争政策市場原理が導入されたことは間違いではなく、将来は例えばソニー大学株式会社などが出現する可能性もある、と力強い新規参入者に期待を寄せられた。最後のまとめの部分を抜粋して掲載する。

* * *

大学の仕組み

最後のまとめですが、危機回避ということについてお話しします。競争政策が導入されて、その競争政策に基づいて新しい新規参入者が入って来る。これまでよりも力強い新規参入者が入って来る。力強さというのは学生のニーズをきちんと把握して、きちんとほしいものを提供する力です。そのような大学が入ってくるものが危機だとすると、危機を回避するために一体大学は何をなすべきか、そして職員の可能性とその責任は何なのかというのを考えてみたいと思います。

大学は何ができるのかと言えば、それは学生がほしいと思っている教育サービスを提供すること、即ち社会が求めているサービスを提供することです。学生は社会の評価を見ながら自分の大学を選んでいるわけですから、つまり、しっかりと教育力のある大学で、きちんと教育してくれて、その教育したという成果をきちんと社会にアピールしてくれ、就職即ち卒業後の生活を保証してくれること

を望んでいるわけですね。

そのために必要なことというのは大学によって違うと思います。例えば地方入試をやってほしいとか、語学教育をアウトソースにしてほしいとか、学生によるサービス評価を導入してほしいとか、色々あるだろうと思えますので、それぞれに考えていくしかありません。

職員の可能性とその責任

職員に何が出来るかということですが、それは「教壇に立つこと以外は全部出来るんだ」、ということをお願いしたいと思いません。では、職員としての資質とは何なのか、でしょうか。

一番大きい能力というのは、「提案力」、「企画力」だと思います。提案力と言っても単なる思いつきではないけません。先程関根先生が「傾聴」ということが大切だとおっしゃいましたが、マネジメント・スタッフ、ティーチング・スタッフ、そして、学生の声をしっかりと「傾聴」することが大事だと思います。それは能力というよりも資質なのかもしれませんね。そして、もう一つ大事な能力は知識だろうと思えます。例えば諸外国の教育制度、学校教育法等の法令、教育政策についての知識、そして財務、人事、労務、税金、学校債等々に関する知識です。

自分の大学に訪れている危機というものを漫然と危機だというのではなく、環境の変化と危機を正確にとらえて、高等教育マネジメントという専門領域があることに誇りをもって、時には先生方とも闘って、勝っていかないといけないだろうなと思います。

（2003年7月4日、第6回大学職員セミナー基調講演「主張」、「提言」より。文責・編集部）

今、大学の内外で 何が起きているのか

本間政雄（ほんま まさお）
京都大学事務局長

次期京大総長選挙を終えたばかりで忙しい中、京都から駆けつけて下さった本間事務局長。国立大学の法人化は大学の内外で起きている、より大きな変化の一部であり、大学の使命を新たな文脈の中で再定義する必要があることを力説された。

大学の内外で起きている大きな変化

国立大学にとって、法人化は大きな課題ですが、改めて大学として何をなすべきかを考えると、もう少し長い時間のスパンで大学の中と外から非常に大きな変化があつて、むしろその中で法人化というものも考えるべきだと思います。

主な変化は四つあります。①まず、学術研究の高度化・学際化・大型化です。この10年、15年、学術面で非常に大きな変化が起きています。地球環境問題や食糧問題を考えてもわかるように、研究の学際化、大型化、そして情報化が非常に早いスピードで押し寄せています。

②次に教育面での変化です。1999-1年に大学設置基準の大綱化が行なわれ、カリキュラムがより自由に編成できるようになりました。一方、80年代から90年代にかけて、日本経済のグローバル化が激しい勢いで進行し、企業で働く人々の知識や技術の内容・レベルに対する要求が大きく変わりました。90年代に入ると、バブル経済が崩壊したこともあり、それまで大学教育に無関心だった経済界や企

業から高等教育のあり方に対し、具体的な注文が出るようになりました。更には知識の絶対量が増加する中で、学生に知識を効率よく、体系的に習得させるにはどうしたらよいか、トレーニングという部分では外国語教育や情報メディアの活用能力の修得に対する新たな要請も出てきています。漫然と授業科目を編成し、それを先生が教えていけばいい時代は終わったのです。社会が期待している大学卒業生とは、どのようなスキルや知識を身につけている者なのか、態度や意欲も含めてですが、真剣に考える必要に迫られています。

③第三に大学維持コストと経理の問題があります。これは重要な話で、研究面あるいは教育面でも、語学教育の充実とか、情報処理教育ということもあつて、大学を維持するコストが非常に高くなつていきます。京都大学の例で言いますと、1960年度の予算は96億円でした。当時学生数が一万三千人、留学生の数が100人です。今日、それが14倍以上の千四百億に膨らんでいます。学生数は二万二千人、留学生は千三百人です。単に学生数が増えただけでなく、大学院が拡充されてきて、経費とか手間隙が非常にかかる状況になってきているのです。そういう中で、教員の数が1960年の二千四百人から三千人に、事務職員は二千五百人いたのが、千五百人に減っています。

事務職員の観点から見ると、研究の高度化とか大型化とか学際化というようなこともあるし、教育についてはいろいろ課題が山積している、というわけですね。扱う経費もかつての牧歌的な大学と違って、実質でいっても非常に規模が大きくなっている状態です。おまけに、これはありがたいことですが、1997年に科学技術基本法が通って、五年間の科学技

術基本計画ということで、最初の5年間で17兆円、第二次計画で23兆円の国家投資を行なうということになっております。大学に入ってくるお金が非常に勢いで増えている。昨年度からは21世紀COE (Center of Excellence) ということで、金額的には二百数十億ですが、ただ受け入れる方は、京都大学の場合ですと、14年度で11件19億円、今年も11件で15億くらいのお金が入ってきます。外部資金もどんどん入ってくるという状況になっていまして、経理は非常に複雑で大変な状況になっていましてね。

④第四は、外部環境の変化です。今日、大学に対する期待が非常に高まっている。大学というのは「知の継承」——人類が積み上げてきた知の資産を継承して、人材育成という形で社会に活かしていくという役割があります。また、「知の創造」ということがあるんですね。新たな知を作り出して、リアルタイムで社会に情報発信しなくてはいけないというようなことになってきています。1960年時点の千六百億の国家投資であれば、それほどきついことを言わなくてもよかつたのかもしれないませんが、さすがに今日の二兆八千億という予算、プラス5年間で23兆円を、大学だけではありませんが、大学中心に投入しようということになってきまして、やはりそれに対するコストパフォーマンスを求めるとは当然の流れです。そういう意味から、行財政改革ということ、これまで以上にコスト意識を持たなければならぬわけですね。

大きな流れの中での変革

このような流れの中で、我々が考えていかなければならないのは法人化の問題にとどまりません。15年前までは全くやらなくてよかつたことを今、やらなければ

ばならない。教育研究評価、情報公開、社会的説明責任などが大きな課題となっています。

今70近い四年制の大学があり、高等教育が飽和状態です。大学審議会の答申を受けて様々な規制緩和が行なわれてきたが、このような変化の中で、それぞれの大学がどのような特色を出していくか、どのような方向で競争をしていくか、「戦略」というものをきっちり立てていかなければならぬようになりました。

法人化については、今、各大学で管理運営機構、意思決定システムを組み立てているところですが、本当に大丈夫だろうかと思うところがあります。よほど性根を据えてやらないといけないと思います。教員と職員ががっちりパートナーシップを組んで、変革に取り組み必要があります。

職員力の強化

最後に職員の役割ということについてお話しします。国立大学の事務官というのは国家公務員試験二種の採用者を中心に構成されていて、全国に三万六千人います。大学の事務職員というのは地元志向で、何となく牧歌的なイメージですが、これからはそういうわけにはいきませんが、国際化、情報化、学際化、高度化、大型化などに対応できる専門性を持った職員が必要となってきます。今いる職員の再教育・再研修を積極的に進めるとともに、これからは人材を全く違うプールから探ることも考えなければなりません。是非優秀な職員を採用して、激動の変革期を乗り切つていただきたいと思えます。

(2003年10月4日、第7回大学職員セミナー特別講演より。文責：編集部)

国立大学法人化

変わる国立大学、変わる大学行政

杉野 剛 (すぎの つよし)
文部科学省高等教育局専門教育課長

国立大学法人化の実質的な責任者であられた杉野課長のご講演は、メモを取らなくとも要旨がきちんと記憶に残るような、大変明快で印象的なお話だった。前半は国立大学法人化とは何か、何のための法人化かについて、後半は国立大学の法人化で、日本全体の大学行政、大学政策が変わるといふ話をされたが、紙面の都合で前半のみの抜粋を掲載する。

「法人化」は「民営化」ではない

「法人化」と「民営化」の議論が入り乱れていますが、文部科学省は「民営化」には反対です。なぜか。それは国立大学でなければ出来ない仕事があるからです。まず数字をあげておきましょう。日本では120年の間に700の大学ができました。私立、公立、国立の大雑把な内訳は500、100、100です。つまり日本は私立が中心の国です。先進国の中で唯一ですが、これは素晴らしいことです。極めて柔軟な大学制度ですが、「バランス」ということを考えると国立大学が必要になってきます。

国立大学は日本の大学制度のバランスとすることによって貢献しているのか。三点あります。①地域配置のバランス。私立の学生の七割は三大都市に集中しているのに対し、国立はその正反対で七割が地方に所在しています。②分野のバランス。私立は人文社会系に偏っています。経営という観点からそうなるのです。逆に金のかかる自然科学系は国立大学が中核を担っています。③学部・大学院のバランス。これも

わかりますよね。国立大学はここ数十年、学部の規模を徐々に縮小し、大学院の規模を拡大しています。このように国立大学は87校しかありませんが、日本の大学システム全体の微妙なバランスを担っているのです。よって、民営化には反対です。なお、国立大学を民営化しようという議論の影には必ず財政削減論が控えているということを知っておいてください。

法人化とはマネージメント改革

国立大学の法人化というのは、一言で言えば、国立大学のマネージメント改革です。現状では、国立大学は法律上、文部科学省の組織の一部となっていて、お役所そのものなのです。概算要求をはじめ、手続きが煩雑です。今のシステムでは、社会の変化が早くなり、大学に対する社会の要求が強くなっている状況下で、まともな運営は望めません。そこで文部科学省から切り離すのです。独立した法人格を与えて、独立した存在にしてしまおう。マネージメントの権限、経営の権限を学長にお返しするというわけです。

それと同時に大学内のマネージメントの仕組みも変える必要があると考えました。一つはトップダウン、もう一つは外部者の参画です。学長選挙も法人化後は学外者半分、学内者半分で構成する学長選考会議で決める形になります。このように経営の権限を渡すのですが、経営というのは金儲けではありません。学内の資源配分という意味です。国立大学にとって一番大切な経営感覚というのは学内の資源配分で、これは国立大学にとって、新鮮且つ極めて重大な課題です。権限を渡す代わりに、その権限を十分に学長中心に活用できるような仕組みを法律で変えた。これが国立大学の法人化です。しかし、冒頭申したように国立大学であることには変わりありません。所在地は法律に書きますし、学生定員は大臣認

可とするなど、国立大学の役割を十分に全うしてもらいつつ、変わらなければいけないところは変わっていただくということなのです。

イコールフットイングのあり方を探る

【特別寄稿】(杉野 剛)
前日本私立大学連盟事務局長

36年間日本私立大学連盟で私立大学間の連携の仕事に携わってこられた日塔氏からは、国立・私立間の格差は正こそが高等教育の危機回避の方策であるとの論が切々と展開された。

私学人からみた国立大学の法人化

イコールフットイング、すなわち国立大学と同じ条件で競争をさせてほしいという、私学人の願いは残念ながら実現しませんでした。学校法人化を期待し、フェアな競争を望みましたが、補助は従来通り、人員削減はしないという結論に、何も変わらなかったということ、みな落胆しています。ただの看板変えに過ぎない、と。

先程杉野課長より縦割り行政の話がありましたが、日本では、国立だからうんと補助する、私立だからあまり補助しないという長年の伝統がありました。我々はそれを突き動かしたいと願っているのです。大学先進30カ国では公財政支出の配分において設置者による差別を行っていません。アメリカなどは奨学金が極めて発達している、機会均等を果しています。

卒業生の活躍

私学の役割、国立の役割が比較的明確に出ているようです。総じて、チャレンジングな分野は私学、国立は学者とか公務員な

どに集中しやすい。ノーベル賞は国立、国會議員は私学が圧倒的に多い。社長は私学、司法試験はほぼ五角。国連職員は私学。大病院の働きは私学。21世紀は金太郎館でない多彩な人材がいよいよ必要になってきます。

競争条件の上で極めて顕著な差別

公財政の支出教育費を見ると、文科系で国立は私立の12から19倍、理工科系で17、18倍、医歯科系で5、6倍です。寄附金税制でも国立は優遇されています。研究費では私学の1に対し、国立は4、公立は0.5というような配分になっています。学費を比べてみると、文科系で私立は国立の1.8倍、理工科系で2.6倍、医歯科系で9.3倍です。

イコールフットイングのあり方を探る

では、自国民を差別しないフェアな国づくりのためにどうしたらよいのでしょうか。①私立へも国立並みの公財政支出を行なう。②国立の学費を私立並に上げる。③公財政支出教育費を全額奨学金とし、国・公・私の子生に分けて隔てなく、経済的必要度に応じ配る。④税制を改正し、私立への寄付も国立と同様とする。⑤諸研究費の配分は新規増額部分を私学に重点的に回す。⑥学校教育法、私立学校法等、様々な法改正。⑦個々の国立大学の経理の開示。⑧国立大学付属病院の収入を上げる。

結論としては、以上のようなフェアな基盤整備を行なうことにより、裾野を広げ、私学のポテンシャルを引き出し、国立の主体性を高め、思う存分国民に活躍願いの、「心」の教育を充実させると共に、科学技術を創造し、人類の福祉に貢献するということを目指したいと思います。

(2003年10月3日、第7回大学職員セミナー基調講演①②より。文責・編集部)

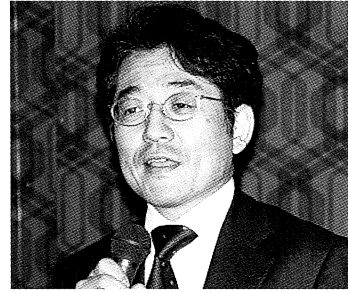
ハウスにいられた
講師の先生方(順不同)



岡崎久彦氏



板東久美子氏



杉野 剛氏



原 康夫氏



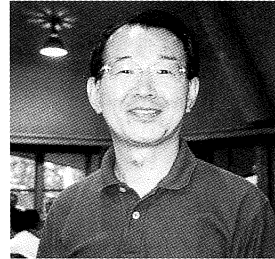
熊倉功夫氏



田坂興亜氏



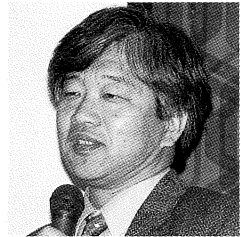
中村博幸氏



石川孝重氏



本間政雄氏



渡邊啓貴氏



高橋和夫氏



高木誠一郎氏



小針 進氏



中井良文氏



天笠啓祐氏



日塔喜一氏



西澤治彦氏



関根秀和氏

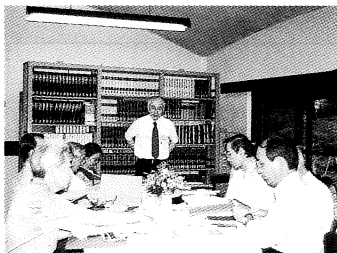


松坂浩史氏



濱名 篤氏

セミナー開催の様



企画委員打合せ



中嶋嶺雄理事長・館長ご挨拶



全体会



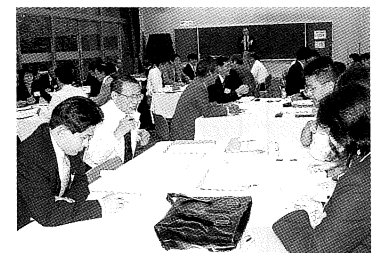
分科会



ようこそ広場で集合写真撮影



モーニング・ツアー



自己表現・評価トレーニング

■第6回大学職員セミナー 2003年7月4日(金)～5日(土)

大学危機回避—今、職員がなすべきことを考える 国公立の壁を越えて、教職員の垣根を取り払って		
プログラム	講師・*企画委員	参加人数
【特別講演】 大学が変わる—今、職員のなすべきこと	板東久美子 (文部科学省大臣官房人事課長)	講演会参加者 134名
【主張】 大学危機回避—大学のミッション／教育／研究 ／社会貢献を明らかにする	関根秀和 (大阪女学院短期大学学長、中央教育審議会委員)	
【提言】 大学危機回避—今、職員に何が出来るのか	松坂浩史 (金沢大学総務課長、地域貢献推進室主任)	セミナー参加者 100名 74校 (講師・委員を含む)
【自己表現トレーニング】 問題点(主張、提言、分科会)の深化	*高橋真義 (桜美林大学学長補佐)	
【分科会】 1. 教育をいかに支援するか 2. 研究をいかに支援するか 3. 社会貢献をいかに支援するか	*佐藤東洋士 (桜美林学園理事長、桜美林大学学長) *佐藤善志 (学習院総務部参事) *佐々木勝洋 (上智短期大学事務部部长) *藤波ゆり枝 (中央大学総合政策学部事務室担当課長) *古矢鉄矢 (北里大学事務本部学事部部长)	

■第40回大学教員セミナー 2003年9月13日(土)～14日(日)

教員の教育力を高める—評価の時代の大学教員のあり方		
プログラム	講師・*企画委員	参加人数
【基調講演】 教員の教育力を高める	原 康夫 (帝京平成大学情報学部教授、元筑波大学副学長)	セミナー参加者 72名 59校 (講師・委員を含む)
【提題】 1. 日本における初年次教育のあり方 2. 日本語表現法と大学教育 —講義と入試の実例から 3. 専門教育のインセンティブ 4. 学生の多様化に対する組織対応の戦略	中村博幸 (京都文教大学人間学部教授) 筒井洋一 (京都精華大学人文学部教授) 石川孝重 (日本女子大学家政学部教授) 濱名 篤 (関西国際大学人間学部教授)	
	*山本真一 (筑波大学大学研究センター教授) *西川孝夫 (東京都立大学大学院工学研究科教授) *吉田 文 (メディア教育開発センター教授) *岡村 浩 (工学院大学工学部教授) *高石道明 (信州大学留学生センター教授) *竹前文夫 (桜美林大学大学院国際学研究科教授) *田中敬文 (東京学芸大学教育学部助教授)	

■第7回大学職員セミナー 2003年10月3日(金)～4日(土)

大学危機回避—今、大学人がなすべきこと— 国立大学法人化 変わる大学、変わらない大学		
プログラム	講師・*企画委員	参加人数
【特別講演】 大学危機回避—今、大学人がなすべきこと	本間政雄 (京都大学事務局長)	講演会参加者 68名
【基調講演 1】 国立大学法人化 —変わる国立大学、変わらない国立大学	杉野 剛 (文部科学省高等教育局専門教育課長)	
【基調講演 2】 国立大学法人化 —変わる私立大学、変わらない私立大学	日塔喜一 (前日本私立大学連盟事務局長・機会均等等研究所長)	セミナー参加者 58名 44校 (講師・委員を含む)
【自己表現トレーニング】 問題点(基調講演、分科会)の深化	*高橋真義 (桜美林大学大学院助教授・大学教育研究所長)	
【分科会】 1. ミッション・教育を支援する 2. ミッション・研究を支援する 3. ミッション・社会貢献を支援する	*佐藤東洋士 (桜美林学園理事長、桜美林大学学長) *佐藤善志 (学習院総務部参事) *佐々木勝洋 (上智短期大学事務部部长) *藤波ゆり枝 (中央大学総合政策学部事務室担当課長) *古矢鉄矢 (北里大学事務本部学事部部长)	

■第189回大学共同セミナー 2003年11月8日(土)～9日(日)

食と人間		
プログラム	講師・*企画委員	参加人数
【基調講演】 1. 共に生きるために ーグローバル化時代の「食」と「農」 2. 日本の食卓の変遷	田坂興亜 (アジア学院校長、元国際基督教大学教授) 熊倉功夫 (国立民族学博物館民族文化研究部教授)	講演会参加者 73名
【問題提起】 1. コミュニケーションとしての食事行動 ー文化人類学の視点から 2. 遺伝子組み換え作物と環境・食糧問題	西澤治彦 (武蔵大学人文学部教授) 天笠啓祐 (市民バイオテクノロジー情報室代表)	セミナー参加者 25名 12校 講師・委員 11名
【分科会】 1. 食の安全保障、遺伝子組み換え作物と環境・食糧問題 2. 日本料理の歴史 3. コミュニケーションとしての食事行動 ー文化人類学の視点から	*北原和夫 (国際基督教大学教養学部教授) *跡見順子 (東京大学大学院総合文化研究科教授) *川人 博 (弁護士) *篠田節子 (作家) *中嶋幹起 (大東文化大学外国語学部教授) *村田雄二郎 (東京大学大学院総合文化研究科助教授)	

■第30回国際学生セミナー 2003年11月22日(土)～23日(日)

アメリカのリーダーシップと抵抗する世界 American Leadership and Resisting Powers		
プログラム	講師・*企画委員	参加人数
【特別講演】 現下の国際情勢と日本外交	岡崎久彦 (NPO法人岡崎研究所理事長・所長)	講演会参加者 98名
【セクション演習】 1. イラク戦争をめぐる欧米対立 2. アメリカの中東政策とイラク 3. 単極世界と中国 4. 米韓・米朝関係と日本 5. 超大国アメリカと国際社会(英語セッション) (America's overwhelming power: what it means and what we should do about it)	*渡邊啓貴 (東京外国語大学外国語学部教授) 高橋和夫 (放送大学教養学部助教授) 中居良文 (学習院大学法学部教授) 小針 進 (静岡県立大学国際関係学部助教授) 高木誠一郎 (青山学院大学国際政治経済学部教授) *宇佐美滋 (日本大学国際関係学部講師、元教授) *中兼和津次 (青山学院大学国際政治経済学部教授)	セミナー参加者 54名 24校 講師・委員 8名

■第8回大学職員セミナー 2004年1月23日(金)～24日(土)

大学改革 大学はどのように見られているか ー国公立の垣根を越えて職員の責務と役割を考える		
プログラム	講師・*企画委員	参加人数
【特別講演】 大学改革ー大学はどのように変わりうるのか	合田隆史 (文部科学省高等教育企画課長)	講演会参加者 65名
【基調講演】 1. 大学改革をどのように考えるのか 2. 子供の眼は大学をどのように見ているのか 【自己表現トレーニング】 問題点(基調講演、分科会)の深化 【分科会】 1. ミッション・教育を支援する 2. ミッション・研究を支援する 3. ミッション・社会貢献を支援する	馬越 徹 (桜美林大学大学院教授) 高木幹夫 (日能研代表) *高橋真義 (桜美林大学大学院助教授、大学教育研究所長) *佐藤東洋士 (桜美林学園理事長、桜美林大学学長) *佐藤善志 (学習院総務部参事) *佐々木勝洋 (上智短期大学事務部部长)	セミナー参加者 58名 40校 (講師・委員を含む)

(肩書は当時)

ハウスを利用して

大学セミナー・ハウスでの合宿

東京経済大学教授 竹前栄治

平成15年の夏は予想に反して涼しかったので、学生たちはバンガローで快適に過ごすことができた。私は目が不自由なため、本館のゲストルームに宿泊した。最近では海外や、海・山での合宿が多かったが、今年も久しぶりにセミナー・ハウスを使わせてもらった。

というのは、ゼミのテーマが「障害者福祉」であり、大学の講義や書物からは得られない聴導犬使用者や盲導犬使用者の体験を聞いたり、手話や点字の講習を行なった。講師にとっても地理的に便利であり、森林に囲まれた静寂なセミナールームで、じっくり勉強できるという点からここを選んだ。

学生同士の交流も活発で、成果は上々だった。アカデミックな雰囲気にもマッチした素晴らしい自然環境の中で、じっくり勉強できたのは生涯忘れられないと、学生たちは感想を漏らしていた。

親切に世話をしてくださった職員の方々に深く感謝。

セミナー・ハウスと

ケムニッツ・オケ

八王子フィルハーモニー管弦楽団合唱団

後援会事務局長 立川富美代

ドイツ・ケムニッツ・オーケストラの団員40名が30時間の長旅を終えて、大学セミナー・ハウスに旅装をといいたのは2003年10月20日の午後でした。少し色

づいた木々の間からやさしい秋の陽射しが洩れていました。

2度目の滞在となる団員たちは口々に「なつかしいこの山!」と言いながら見直し、始めてきた団員に色々教えていました。ドイツ・ケムニッツは夜はもう零下5度位とか、日本はまだ夏だ!と大喜びでした。

今回は前回と同じく合同の演奏会に、後援会がお招きしたのですが、この前がとでも楽しかったらしく、パートナーを引つ張ってきた団員が多く、団長は息子2人も参加しました。遠いケムニッツは旧東ドイツ、ドレスデンの隣町人口35万人の静かな町です。6年前からお互いに音楽を通じてとても深い交流をしています。

セミナー・ハウスでの生活は、彼らにせせこましい都会のホテルと違い、広々として、緑が多く、美しい自然をとでも楽しみました。夕食後の2時間は必ず練習、各部屋からヴァイオリンやフルートなどの美しい音色が聞こえてきます。それからは山の頂上にある「交友館」で楽しい時間が始まるのです。日本のビールはおいしくないと言いつつ、自販機が空になるくらい飲みます。閉店になると外のテーブルに移動、彼らはその場所を「ビアホール」と名づけていました。おしゃべりし、飲み、歌い本当に楽しそうでした。前回好評の「お手前」も殆どの人たちが加わり、取り囲んでいる人たちはカメラマン。広園寺の座禅も体験し、本物の芸者さんの踊りを見たり日本の伝統文化を知って頂きました。

お礼状の中でセミナー・ハウスでの生活にふれ、「心をこめて」という言葉の意味がよく分かりましたと書かれてありました。職員のかたはもとより夜の警備のおじさんまでが心をこめておもてなしをして下さった事は、国が違っても言葉

が通じなくても、みんなの心の中に通いました。交流の回を重ねる度にお互いの心が開いていくのが良くわかりました。

私たちは後援会長のご理解のもとに音楽を通じての本当に手作りの民間外交と想っております。そしてアマチュアの市民オーケストラがこのような企画で国際交流のできることを大変幸せに思っております。この次いつお招きできるか分かりませんが、彼らはきつとまたセミナー・ハウスだろう?と期待しておられるのではないかと思います。それくらいセミナー・ハウスでの生活が大好きになったからです。

思いがけない蠟梅植樹

立教大学教授 小西正捷

いまでこそ「大学セミナー・ハウス」というと、「どの大学の?」と聞かれらる程「セミナーハウス」の語は普通名詞化しているが、スタート当時はそれは、その思想とともに非常に斬新な名であり、かつ設備であった。私はまだ院生であった69年から当ハウスを使わせていたが、やがて74年に千人会員にもさせていただいたから、そのお付き合いは千人会員としても約30年、ハウス自体の歴史のほとんどを共にしてきたことになる。

その間、大学の合宿演習のみならず、研究会やシンポジウムなどで年二、三度はハウスを訪れ、そのたびごとに親切なスタッフや緑豊かな自然に癒されてきた。この施設を初めて訪れる学生の多いときには、必ずまず始めにスタッフの綿引二郎さんから当ハウスの歴史や理念の話の伺い、また彼の退職後は私がそのような話をし、何か安い宿泊施設かのようには勘違いしている学生に、その理念を伝えてきた。ただ、それが彼らにどの程度伝わっていたのかは半信半疑のまま

あった。だが実は、ついに私も定年を迎える最後の演習を行った今年に向けて、学生諸君は私に内緒で、植樹計画を進めていたのである。

ハウス構内に数多くある記念植樹の木札も、ハウスの立派な歴史である。そのうちの一つに名を残してくれることもうれしいが、ようやくにして、これまで私がうらやまに述べてきたハウスの理念、ひいては大学教育の理念が学生諸君に伝わっていたことの証拠を、一本の若々しい蠟梅(英名 winter sweet)で残してくれたことが本當にうれしい。

春一番に咲く蜜蝋のような黄色の花が、これからは茅葺きの遠来荘の庭に咲く。普段ならば多忙の期末ゆえ、あまりハウスを訪れる季節ではないのだが、もう職を引く来年からは、この蠟梅がハウスへ私をいざなってくれるだろう。ハウスも学生諸君も、ありがと。



小西先生とゼミの学生たち (2003.7.6)

開館四十周年記念募金第5回報告

◇募金総額 二六、九六一、四二七円（平成15年12月31日現在）

創立四十周年記念募金も二〇〇三年三月三十一日で一応の期限を迎えましたが、募金目標の二億円に到達することはできませんでした。その後文部科学省から再度、免税優遇措置のある特定公益増進法人の認可を得て「開館四十周年記念募金」と改称し、引き続き第二期の募金活動を展開中です。千人会の会員、ご利用者、セミナーの講師はじめ多くの個人の方々並びに企業や各種団体の方々から引き続きご寄付をいただき、二〇〇三年十二月三十一日現在で二六、九六一、四二七円となりました。ニュースNo.165号掲載分以降の申込者御芳名を以下に記載させていただきます。厳しい経済情勢の折ではありますが、引き続きご支援のほどよろしくお願い致します。

◇募金申込者（芳名（入金順））

（平成15年4月1日～12月31日）

五〇、〇〇〇円	株式会社米屋殿	三七、一六〇円	佐藤東洋士殿	五、〇〇〇円	中島 章殿
四〇〇、〇〇〇円	中川秀恭殿	五、〇〇〇円	渡辺敬夫殿	一〇、〇〇〇円	日本女子大学付属高等学校殿
二〇〇、〇〇〇円	日本アイビーエム株式会社殿	一〇、〇〇〇円	藤波ゆり枝殿	一〇、〇〇〇円	東壽太郎殿
一〇、〇〇〇円	八南交通株式会社殿	一〇、〇〇〇円	古矢鉄矢殿	一〇、〇〇〇円	笹岡太一殿
一五、〇〇〇円	長崎久江殿	一〇、〇〇〇円	野沢 浩殿	一〇、〇〇〇円	大友 浩殿
一五、〇〇〇円	須藤貴以子殿	一〇、〇〇〇円	原島幸太郎殿	一〇、〇〇〇円	金 容媛殿
二〇、〇〇〇円	庵谷利夫殿	一〇、〇〇〇円	泉 治典殿	一〇、〇〇〇円	武田昌輔殿
二〇、〇〇〇円	高石道明殿	一〇、〇〇〇円	清水昭次殿	一〇、〇〇〇円	柏原啓一殿
一〇、〇〇〇円	工学院大学接合研究室殿	一〇、〇〇〇円	萩原洋太郎殿	一〇、〇〇〇円	ウシオ電機株式会社殿
五〇、〇〇〇円	株式会社オートマチックサービス殿	一〇、〇〇〇円	松原洋太郎殿	一〇、〇〇〇円	北村嘉行殿
五〇〇、〇〇〇円	富士ゼロックス株式会社殿	一〇、〇〇〇円	清永昭次殿	一〇、〇〇〇円	木畑洋一殿
二〇〇、〇〇〇円	新日本製鐵株式会社殿	一〇、〇〇〇円	萩原洋太郎殿	一〇、〇〇〇円	柳澤 治殿
九〇、〇〇〇円	酢屋善元殿	一〇、〇〇〇円	白川和雄殿	一〇、〇〇〇円	茂木俊彦殿
一〇、〇〇〇円	伊藤清子殿	一〇、〇〇〇円	福田一郎殿	一〇、〇〇〇円	三井実業株式会社殿
五〇、〇〇〇円	三宅 彰殿	一〇、〇〇〇円	肥前栄一殿	一〇、〇〇〇円	神田道子殿
一〇、〇〇〇円	鈴木三男吉殿	一〇、〇〇〇円	三浦安子殿	一〇、〇〇〇円	後藤祥子殿
五、〇〇〇円	中野スミ子殿	一〇、〇〇〇円	手塚千鶴子殿	一〇、〇〇〇円	中富光国殿
		一〇、〇〇〇円	江幡玲子殿	一〇、〇〇〇円	小西正捷殿
		一〇、〇〇〇円	田村 献殿	一〇、〇〇〇円	富村義彦殿
		一〇、〇〇〇円	原 康夫殿	一〇、〇〇〇円	秋山正幸殿
		一〇、〇〇〇円	第40回教員セミナー参加者殿	一〇、〇〇〇円	狩野紀昭殿
		一〇、〇〇〇円	栗原 裕殿	一〇、〇〇〇円	逸見謙三殿
		一〇、〇〇〇円	野口鶏卵殿	一〇、〇〇〇円	茅野 實殿
		一〇、〇〇〇円	澤島侑子殿	一〇、〇〇〇円	宮野三郎殿
		一〇、〇〇〇円	西原 正殿	一〇、〇〇〇円	石井麻耶子殿
		一〇、〇〇〇円	森ビル株式会社殿	一〇、〇〇〇円	京王電鉄株式会社殿
		一〇、〇〇〇円	鈴木三男吉殿	一〇、〇〇〇円	新井 明殿
		一〇、〇〇〇円	キャノン株式会社殿	一〇、〇〇〇円	柳井道夫殿
		一〇、〇〇〇円	佐木 豪殿	一〇、〇〇〇円	鈴木文子殿
		一〇、〇〇〇円	相澤益男殿	一〇、〇〇〇円	土井恵美子殿
		一〇、〇〇〇円	都立大学同窓会（八雲会）殿	一〇、〇〇〇円	おさひめ幼稚園殿
		一〇、〇〇〇円	山澤逸平殿	一〇、〇〇〇円	桜美林大学殿
		一〇、〇〇〇円	徳座晃子殿	一〇、〇〇〇円	都立南大沢学園養護学校殿
		一〇、〇〇〇円	竹村五夫殿	一〇、〇〇〇円	築田長世殿
		一〇、〇〇〇円	八田昭雄殿	一〇、〇〇〇円	松島 恵殿
		一〇、〇〇〇円	小野寺嘉孝殿	一〇、〇〇〇円	福永寿巳夫殿
		一〇、〇〇〇円	鳥居泰彦殿	一〇、〇〇〇円	中村妙子殿
		一〇、〇〇〇円	松平文明殿	一〇、〇〇〇円	梶谷 誠殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	高橋和之殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	堀井啓幸殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	有山正孝殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	中村正一殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	佐藤音彦殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	斎藤信房殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	芳賀 徹殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	小林澈郎殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	坂本光一殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	中富額隆殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	熊田慎宣殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	松岡八郎殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	松澤正夫殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	奥島孝康殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	小池 滋殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	原田行男殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	鈴木 恂殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	大島英樹殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	山澤逸平殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	徳座晃子殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	竹村五夫殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	八田昭雄殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	小野寺嘉孝殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	鳥居泰彦殿
		一〇、〇〇〇円		一〇、〇〇〇円	松平文明殿

平成15年度 第2回常務理事会

平成15年12月14日 大学セミナーハウス

出席者 中嶋領雄（理事長・館長）、本江哲郎（専務理事）、宇野重昭、荻上紘一、佐藤保、（陪席）三宅彰

「主な議事」
募金状況、利用実績および予約状況、主催セミナー事業、食堂運営状況、財務状況（11月までの予算執行状況）、留学生会館建設計画（案）、施設改修計画（案）、主催セミナーの課題、京王バス路線、今後の遠来荘のあり方、他



一〇、〇〇〇円	本田和子殿
二〇、〇〇〇円	並河一道殿
一〇、〇〇〇円	山代昌希殿
一〇、〇〇〇円	斎藤 眞殿
一〇、〇〇〇円	山口素夫殿
一〇、〇〇〇円	島田治夫殿
一〇、〇〇〇円	関口利男殿
一〇、〇〇〇円	大川勇次郎殿
一〇、〇〇〇円	中兼和津次殿
一五〇、〇〇〇円	第30期十大学合同セミナー殿
八、九〇四円	募金箱より
	以上

会費をありがとうございました

(2003年7月〜12月 敬称略)

風間邦光、黒田道雄、三橋文雄、石川信男、入江和生、山代昌希、金子六郎、長浜洋一、中村浩三、松島恵、慶谷伸代、石川達雄、藤原鎮男、金谷憲、高橋忠次郎、山西貞、阿部齊、川原啓美、古本捷治、松平文朗、岡沢憲美、窪田富男、築田長世、橋本智、吉田美穂子、厚東偉介、千羽喜代子、宮本瑞夫、柏木恵子、三宅彰、松尾秀雄、西成典子、米村貞藏、小池滋、原誠、山本茂、桐澤潔、色川大吉、有末賢、五十嵐武士、中野斉子、荒川由美子、中山光雄、伊藤意智郎、柴田誠、鈴木成文、綿引二郎、鳥海保子、十代田知三、新井勝紘、原島幸太郎、八田昭雄、大蔵隆雄、中島文夫、長谷川幸男、荻原洋太郎、山本武彦、志賀英、小西悟、市川博、太幡祐己、岡昭夫、佐藤豪、渡辺昭夫、稲田拓、松瀬貢規、柳下綱道、八幡義博、宮野三郎、岡村文子、藤田淑子、鈴木一道、松本宏、沖塩莊一郎、福島正久、小川信子、小池生夫、野崎昭弘、長内了、伊藤一郎、得田保雄、木村宗男、朽津耕三、岡村秀勇、横山宏、奥田眞丈、村上陽一郎、竹前文夫、高石道明、山岸健、林勲、田村恭、並河一道、田中栄、船山信子、高村多賀子、吉原健吾、長田洋子、箱木眞澄、大滝祐子、平野由紀子、高橋康之、末松安晴、東壽太郎、谷俊治、斎藤信房、狩野紀昭、関口利男、今井淳、小林善彦、田中弥寿雄、栗原尚子、五十嵐香、川鍋正敏、松田千鶴子、前川真理、篠寄啓助、川原栄峰、鈴木順子、荒川幾男、酢屋善元、井手久登、木畑洋一、松岡八郎、関本昌秀、平野敬一、小堀桂一郎、青柳清孝、森田信義、江尻美穂子、平野健一郎、小田滋、牧内操、伊藤修、堀光男、宇野重昭、福田隆義、岩下秀男、小山宙丸、鬼塚宏太郎、滝口亨、久留都茂子、赤木愛和、外間寛、斉藤孝、米満澄、扇谷尚、熊川忠、田

島澄江、田村皖司、梶木隆一、山下幸夫、外池孝雄、篠沢公平、山科高康、小林澈郎、戸張よし子、青木生子、今井哲哉、近藤保、小松八郎、田村光三、久場嬉子、栗原裕、小和田恆、増田義男、飯野利夫、栗田寛、角尾稔、尾田幸雄、生山智己、山田暁、甲斐隆、加藤一郎、澤孝一郎、石井明、城謙輔、池田温、慶伊富長、横沼健雄、永井克孝、濱川祥枝、吉田豊、堀井啓幸、徳重昌志、伊藤學、三浦安子、岡崎正、青柳総太郎、平木典子、塚本利明、籠信義、金台然、石田孝夫、有山正孝、川端香男里、小谷正博、杉山好、大口勇次郎、有馬弥子、田中國昭

会員からのメッセージ

★大学セミナー・ハウスのますますの充実を願っています。 黒田道雄

★誕生日レター有難うございました。お陰様で健康でこの日を迎えられました事に感謝して千人会費を送らせて戴きます。セミナー・ハウスの増々の充実ご発展を祈念致します。 三橋文雄

★誕生日の絵はがきお送りいただきありがとうございます。大学セミナー・ハウスの一層のご発展を祈ります。 松島 恵

★貴会の御発展をお祈り申し上げます。 慶谷伸代

★誕生日へのお言葉有難う頂きました。皆様の一層の御健勝とセミナー・ハウスの益々の御発展を祈ります。 藤原鎮雄

★お陰様で元気に日々忙しく過しております。退職して縛りのない生活の善し悪しを実感しております。 山西 貞

窪田富男

★お誕生カード誠に有難うございます。最近、セミナー・ハウスにお邪魔できる日が少なくなり残念ですが・・・セミナー・ハウスのますますの発展を祈ります。またお世話になる日を楽しみにしています。 厚東偉介

★誕生日カードをお送り頂きありがとうございます。会費をお送りますのでよろしくお願ひいたします。 桐澤 潔

★この度、鳥海俊宏宛に誕生日お祝いのお便りを有難うございました。貴大学セミナー・ハウスの創立頃より、お世話になりました。夫、鳥海は去る二月九日に死去いたしました。代りまして、妻保子が引き継ぎます。鳥海保子

★今年度もちまして特別専任教授も退任となりますので、千人会も退会いたします。永い間お世話になりました。四季のハウスは種々良い思い出となりました。 十代田知三

★今秋は勤務校の歴史学専攻の学生、90余名をつれて久しぶりに利用させてもらいます。自分自身の大学時代、セミナー・ハウスでの思い出がありますので、印象深い合宿にしたいと思っています。 新井勝紘

★残暑の候となりました。八月で80歳になりました。ふりかえってみますと長生きをしたように思います。軍隊生活二年六ヶ月をし、終戦により復員し、食糧不足に対し、両親と頑張つてなんとかすごすことが出来ました。縁あって教育機関に入り、多くの先生方にお世話になりました。会費を送ります。会費の分のこりは寄附させていただきます。 原島幸太郎

★本年三月末を以って獨協大学を定年退職し、教職の現役を引退いたしました。勝手ながら今回を最後の千人会費納入とさせていただきます。 中島文夫

★身辺多忙でしたため、ついすっかりしてご送金が遅くなりましたことをお許し下さい。 長谷川幸男

★パスデーカードを有難うございました。おかげ様で73歳になりました。セミナー・ハウスのご発展をお祈りします。 荻原洋太郎

★転居して一年、新しい環境にも慣れ、何とか元気にしておりますので、御放念下さい。ますますのご発展を祈り上げます。 志賀 英

★事情あつて、退会させていただきます。 小西 悟

★横浜国立大学から定年退職で帝京大学文学部教育学科教授にと変わりました。よろしくお願ひします。 市川 博

★73歳まで教育現場で仕事をさせていただき、大学セミナー・ハウスとは深い付き合いをさせていただきました。今年で82歳になり、引退後趣味の世界を楽しんでいます。セミナー・ハウスの御発展を心から祈っております。 佐藤 豪

★細心ながら続けさせていただければと存じます。 渡辺昭夫

★本日誕生日のお祝いを戴きました。此の処気象の変化はげしい日々が続いておりますが、おかげ様にて81歳を無事過ごしております。余生を、意義ある一日を大事に暮らす心算です。ハウスの益々の充実・発展をお祈念申し上げます。 柳下綱道

★誕生日のカードを有難うございました。お陰様で元気に73歳を迎えることができました。 宮野三郎

★太陽の恵みをあまりいただかないうちに秋風が吹きそです。セミナー・ハウスの木々はどのような秋模様になるのでしょうか？皆様の御健康をお祈りします。 小川信子

★海外出張のため、納入が遅れました。お陰様で61歳の誕生日を無事迎えました。新規事業の成功を心からお祈り申し上げます。 長内 了

★もう誕生日が来てしまいました。一年は早いですね。生涯教育の場としての大学セミナー・ハウスの役割は大きいと思います。 得田保雄

★セミナー・ハウスの構内の写真なつかしく拝見しました。 木村宗男

★千人会の発展を祈っています。 岡村秀勇

★困難な時期ですが、ハウスの御発展を念じております。 村上陽一郎

★平成十一年四月にスタートした大妻女子大学の人間関係学部、この三月に第一回卒業生が社会に巣立ちました。幸いです。 山岸 健

★御発展をお祈りいたします。 船山信子

★千人会費として5000円ふりこみます。今後とも後進の育成をよろしく願います。 吉原健吾

★教育の現場を離れて、十五年になり、大学とはまったく関係のない生活を送っておりますので退会させていただきたいと思っております。 高橋康之

★九月で73歳になりました。家族や若い人々に支えられながら、非常勤とボランティアで医療と教育と福祉の仕事が続けています。 谷 俊治

★セミナー・ハウスの一層のご発展を祈ります。自宅より遠方なので、ご無沙汰申しわけありません。 齋藤信房

★創立以来、永年お世話になりましたが、なんとか喜寿を迎えることができましたので、これを機に退会させていただきます。今後の御発展を祈り上げます。 今井 淳

★ますますの充実とご発展をお祈り申し上げます。美しいカードを毎年ありがとうございます。 前川真理

★誕生日カードありがとうございます。おかげさまであい変わらず消光しております。厚く御礼申し上げます。大学改革が重大な問題となっております今日、大学セミナー・ハウスの皆様のご活躍を期待致しております。 松岡八郎

★学生達と泊めて頂き、読書会をした日々が懐かしく思い出されます。大学セミナー・ハウスの更なる御発展をお祈り致します。

★早いもので、私が初めて第6回大学共同セミナーに参加してから三十八年位経ちます。今年十月の誕生日で満60歳の還暦を迎えまして。会社生活も卒業し、これから第二の人生を新たに迎えるべく充電中です。 伊藤 修

★誕生日カードありがとうございます。この方法を通して、千人会の方々の音信がうかがえることを楽しみにしています。 宇野重昭

★ご発展を祈ります。 赤木愛和

★大阪人間科学大学開学三年目、順調に進行。 葦英女子短大の学長も兼ねています。

★千人会の会費をお送りいたします。誕生日のお祝いのお言葉をありがとうございます。同封の四つ葉のクローバーの写真を嬉しく思いました。 熊川 忠

★誕生日のカード有難うございました。70歳半ばにかかり、「人生に関する事柄は、多数の者に人気がある方が善いという風にはならない」との古人の言葉に倣って、もう少し大胆に「我は反時代的たることを恥とせず」と自らを励まして歩いていきたいものであります。 小川徹郎

★パスデーカード、有難うございました。 戸張よし子

★まとめる仕事をかかえていますので、余生を元気で、毎年会費をお払いできることを願っております。 青木生子

★きれいな誕生日カードを有難うございました。80歳になりました。ハウスの発展をお祈り申し上げます。 小松八郎

★セミナー・ハウスの美しい自然と壮観な建物に感動しました。タクシーの運転手さんがたぬきを見たとお話をされていたの思い出します。横浜からさほど遠くなく、近いうちにぜひご訪問したいと思っております。今後ともよろしくお願い申し上げます。 栗原 裕

★健康で千人会の会費が払えることを喜んでおります。 角尾 稔

★大学セミナー・ハウスの充実を祈念致しております。 甲斐 隆

★長期入院のため、今回で退会させていただきます。 加藤一郎

★「ハウスの紅葉」カードをありがとうございます。83歳の誕生日をむかえることが出来て有難く思います。 慶伊富長

★大変遅くなりましたが、会費をおとどけいたします。セミナー・ハウスにもぜひ分ごさたしてしまいました。一度折をみて新しいたたずまいをゆつくり拝見いたしたく存じております。 永井克孝

★パスデー・カード有難うございました。今年も何とか80歳の誕生日を迎えることが出来ました。ただしかなり老化いたしましたので、今回かぎりで会費を止めさせていただきます。ハウスの今後の一層の御発展をお祈りいたします。 濱川祥枝

★懐かしい写真のはいっただお葉書ありがとうございます。いよいよ独法化。非常勤、研究費の大幅カットなど気の減入りそうな情報しか入ってきませんが、少しでも前向きに授業、研究に臨みたいと思っております。よろしく御指導下さい。 富山大学 堀井啓幸

★千人会C会費お送り申し上げます。今年も誕生日無事迎えられました。感謝です。 岡崎 正

★二人の姪は、大学三年と一年、セミナー・ハウスとは、緑のない学生生活を謳歌しているようです。 青柳総太郎

★貴セミナー・ハウスのご隆昌を念じ上げます。 金 台侏

★昨年度は、よんどころない事情のため会費納入、失礼いたしました。ようやく千人会費の最低額を負担できるようになりました。ハウスのますますの御発展を祈り上げます。 杉山 好

▼新会員をご紹介します。 名義変更 前国際通信工業株式会社代表取締役塩見利夫

様から現代代表取締役羽方純様に、元鳥海会計事務所長鳥海俊宏様から鳥海保子様に、元八王子市長後藤聰一様から後藤敏明様に 新加入会員

梅沢博保様(老人ホーム経営)、中野斉子様(広島市立己斐東小学校教員)、竹前文夫様(桜美林大学教授)、高石道明様(信州大学教授)、栗原裕様(愛知大学教授)、中村正一様(信州大学職員)

165号で古畑和孝様のお名前に誤りがありました。訂正してお詫びを申し上げます。

寄贈図書(2003年7月～年12月)

- 『工学院大学研究報告第94号、第95号』
- 『工学院大学共通課程研究論叢第40号、第41号』
- 『工学院大学 工学院大学 高等教育研究開発センター30年の歩み』
- 『大学論集第33集』
- 『大学の統合・連携』
- 『天理大学の現状と課題』
- 『山と里を活かす』
- 『山に学ぶ、山と生きる』
- 『天理大学 高石道明殿』
- 『大学改革がわかる』
- 『自己点検・自己評価報告書』
- 『専任教員研究業績調査』
- 『武蔵八十年のあゆみ』
- 『武蔵大学論集・柴垣和夫教授古希記念号』
- 『武蔵大学 高橋真義殿』
- 『時』
- 『現代のエスプリ436』
- 『ボランティアスラム』
- 『財団法人大同生命国際文化基金』
- 『茅原華山と近代日本—民本主義を中心に』
- 『孫国鳳殿』
- 『堀井啓幸殿』

ご利用状況

2003年7月～12月
* 11月2回利用
** 11月3回利用
日帰りはグループ数のみ
(延べ人数には日帰りの利用者含まず)

- 7月(45グループ、延二、一、一九人)
中央大学教授 横湯園子
立教大学教授 小西正捷
東京工業高等専門学校電子工学科 小貴 悟
明星大学講師 大杉 覚
東京都立大学助教授 仁科貞文
青山学院大学助教授 西岡達裕
桜美林大学助教授 阿部 洋
日本大学教授 前沢伸行
東京都立大学大学院教育院生室 大竹美登利
東京都立大学助教授 五味義夫
東京学芸大学助教授 西村純子
東京大学生産技術研究所大井研究室
聖心女子大学教授
明星大学講師
学習院大学哲学研究室
明星大学通信教育部
中央大学通信教育部
十大学合同セミナー
横浜市立大学教育学教室
日本女子体育大学附属二階堂高等学校
哲学若手研究者フォーラム
東京都立成瀬高等学校茶道部
地球電磁気・惑星圏学会若手会
獨協大学講師 今福 啓
Aプラス科学の国 平山満紀
江戸川大学助教授
モデル理論夏の勉強会
那須高原海城高等学校
日輪グループ
日立INSソフトウェア
Dプロ手話教師センター
社会福祉法人けやきの杜
生活協同組合東京マイコピー
粉体工学会関東談話会
(南)ジェームス事務所
蒲田会
高橋聖書集会・ヨシユア会
ABC測量研究会
文学教育研究者集団
(個人利用)

- 8月(74グループ、延三、八六三人)
明治大学教授 栗原 彬
東京大学環境三四郎
早稲田大学劇団コンツェルト
恵泉女学園大学教職課程 倉田良樹
一橋大学教授 石井 敏
桜美林大学教授 朝岡幸彦
東京農工大学助教授 乾 彰夫
中央大学国連研究プロジェクト
法政大学・武蔵工業大学合同ゼミ
中央大学国際教育分科会
武蔵工業大学助教授 森木一紀
立教大学助教授 福山清蔵
東京理科大学大澤ゼミ 佐伯 胖
青山学院大学教授
中央大学通信教育部
明星大学通信教育部
東京都立大学国際課題研究会
中央大学・東京工業大学勉強会
東京大学財政学研究会
東京経済大学助教授 牧原憲夫
国際基督教大学ティーンズサ
エティ
国際基督教大学言語研究会
武蔵工業大学エコーワークス
駒澤大学助教授 岩波文孝
青山学院大学ハンドベルクワイア
東京女子大学
明治大学協同研究会
埼玉大学教授 福岡安則
東京大学教授 内宮博文
青山学院大学教授 岩崎三郎
青山学院大学エンカウンター・グルー
ブ研究会
東京学芸大学助教授 馬場哲生
神奈川県立相模大野高等学校演劇部
現代と経済
日本インド学生会議
明海大学助教授 投野由紀夫

- 9月(87グループ、延二、六二一人)
大妻女子大学教授 松本寿昭
東京経済大学助教授 竹前栄治
芝浦工業大学協学生委員会
学習院大学大学院政治学研究所 山口和孝
埼玉大学教授
佼成学園高等学校
国際学生シンポジウム
現代経営学研究会
東京家政大学教授
たんぼぼ会
杏林大学教授
野球研究会マルコスターズ
野協大学講師 二宮 哲
東京大学スポーツ新聞連盟
アメリカンサマーキャンブ
明神フェニックスFC
東京神学大学公開夜間神学講座
女子美術大学附属高等学校中学校
中央大学OB法律研究会
ルソール合奏団
文学教育研究者集団
行政課題研究会
相模原キリスト教会
カトリック新求道共同体桜町教会
A I T C
日本キリスト改革派東部中会青年会
大久保集會
N P O 法人エコ・コミュニケーション
センター
あきる野市教育委員会
インスタープリティション協会
(社)国際商事法研究所
町田クリスチャンセンター
国際チャリティー協会アムリタハート
シエルクスピアリアン・ブレイハース
八南作文の会
(株)イオンフォレスト
(株)エアロ・フォート・センター
J D C C 教会
ダンシングラジャーズ
ダンシングウッドベッカー
(個人利用)
江東区立深川第7中学校 南出新治
(日帰り利用)
いろいろの郷

- 電気通信大学教授 * 福田 豊
武蔵工業大学教授 佃 誠
早稲田大学芸術学校 明海大学教授
武蔵大学講師 淑徳大学教授
桜美林大学教授 文教大学教授
東京経済大学助教授 東京IT会計法律学園
東洋英和女学院大学教授 十文字学園女子大学講師
東洋英和女学院大学助教授 神奈川大学助教授
千葉大学炭焼きグループ 創価大学心理教育相談会
法政大学湯川ゼミナール 駿河台大学助教授
東京学芸大学助教授 前橋工科大学建築学科
日本大学雄弁会 杏林大学講師
東洋英和女学院大学助教授 南八王子サッカークラブジュニアユース
東京工業大学新聞部 有田富美子
立教大学インド考古研究会 奥住秀之
早稲田大学劇団絶対安全ピン 毛井正典
芝浦工業大学助教授 稲葉振一郎
明治学院大学助教授 今井重孝
青山学院大学助教授 * 箕口雅博
立教大学助教授 杉山邦夫
千葉商科大学体育会本部 鄭 映惠
日本大学教授 久米昭元
大妻女子大学助教授 芳賀 繁
立教大学助教授 原 伸子
早稲田大学総合管理局チーフ 齊藤信治
中央大学助教授 藤川昌弘
法政大学教授 木村松雄
青山学院大学助教授 熊谷彰矩
中央大学助教授 田中拓男
明治大学建築学科科学技術英語 (日帰り利用)
青山学院大学助教授 井田昌之
青山学院大学助教授 横谷輝男
お茶の水女子大学助教授 平野由紀子
外池滋生 村上 健
津田塾大学助教授 村 上 健
日本大学化学工学研究室 嶋津 格
千葉大学助教授 小林保彦
青山学院大学助教授 江口幸治
東京理科大学建築学科 大塚和夫
埼玉大学教授 矢野眞和
東京都立大学助教授

- 10月(33グループ、延一、〇五四人)
お茶の水女子大学人文科学科地理学コ
ース
法政大学助教授 平塚眞樹
桜美林大学助教授 佐藤考一
法政大学C L S 英語サークル 柳瀬典由
東京経済大学講師
学習院大学フランス会部
中央大学国際関係研究会
数論セミナー
明海大学教授
小池生夫
淑徳大学教授
榎沢良彦
文教大学教授
宮原辰夫
東京IT会計法律学園
設楽優子
神奈川大学助教授 岡本専太郎
神奈川大学助教授 出雲雅志
創価大学心理教育相談会 渡辺裕子
駿河台大学助教授 前橋工科大学建築学科 伊藤 盡
杏林大学講師 南八王子サッカークラブジュニアユース 受験生
青年法律家協会弁護士学者合同部会
昭和大学医療短期大学OB
東京多摩いのちの電話
さつき合唱団
トヨタホーム東京(株)
葉日本堂
日輪グループ
富士電機システムズ(株)
運動連鎖アプローチ研究会
キリストの教会伝道学院
学科製図c o m
日本ローア・バプテストフェローシッ
プ
鉄道総研コーラス班
奇術クラブ「マジック・エコー」
(個人利用)
北星学園大学附属高等学校 松元保昭
お茶の水女子大学 本郷朝香
中央大学通信教育部 近藤節朗
(日帰り利用)
中央大学助教授 中野目善則
いろいろの郷 *
(株)エイコークリエイティブ

- 早稲田大学教授 山本武彦
早稲田大学教授 渡辺仁史
武蔵大学社会学部学考法ゼミ
東京理科大学工学部建築学科
中央大学教授 徳永英二
早稲田大学講師 山口尚志
中央大学教授 片桐稔晴
立教大学講師 宮地忠彦
共立女子大学教授* 生井英孝
多摩美術大学情報デザイン学科
杏林大学教授 千葉 洋
鷺田特定 千葉 洋
日本女子大学附属高等学校
日輪グループ
調布南キリスト教会
(社)日本エネルギー学会
(株)香科舎
日本教育臨床研究所
NPO法人話し方普及協会
八王子フイルハーモニー管弦楽団・合唱団
(社)日本POP広告協会
〈個人利用〉
明星大学通信教育生* 高橋久美子
ひかり味噌(株)
〈日帰り利用〉
いろりの郷*
- 中央学院大学助教 関岡保二
北里大学人事部
バイオマテリアル若手研究会
郡内研究会
共立女子大学教授 平石妙子
専修大学文学部
玉川大学教授 山口栄一
拓殖大学教授 新田目夏実
受験生 SINGS
町田クリスチャンセンター
姿勢と歩行研究会
ルソール合奏団
エコ・ネット八王子
日輪グループ
多摩炭やきの会
(株)ベック
GATEWAY EXCURSION
山形県南陽市観光物産課
日本キリスト教団相模原教会
(株)キョーカ
地域交流牧場全国連絡会関東ブロック
アレクサンダー・アンシエイツ
世界平和教授アカデミー
東京都フォークダンス連盟
〈個人利用〉
東京コミュニケーションアート専門
学校 黒須順子
〈日帰り利用〉
東洋公衆衛生学院
いろりの郷*
一里庵社中茶会
- 早稲田大学教授 森元 孝
青山学院大学教授 岩田伸人
工学院大学教授 吉田偉郎
早稲田大学教授 片山 寛
立教大学助教 有馬賢治
日本大学助教 古田智久
明星大学通信教育部 松嶋敏泰
早稲田大学教授 立教大学異文化コミュニケーション
研究科
東海大学教授 吉田民雄
A.L.S.A Japan
千葉明德短期大学講師
足利工業大学講師 キム・ヨンジュ
静岡産業大学助教 渡辺美樹
京都工芸繊維大学 大塚英揮
共立女子大学助教 阿部圭子
東京高体連陸上競技部中長距離ブロッ
ック
東京都立科学技術高等学校生徒会
天文冬の陣
高校生の進路指導を考えるワークシ
ョップ委員会
早稲田大学まちしゅう
創価女子短期大学イタリヤ研究会
マレーシア留学生
I.T.C
経営21研究会
国際炭焼協力会
社会福祉法人けやきの杜
東京電子工業(株)
文学教育研究者集団
A.I.T.C
〈個人利用〉
明治学院大学 田中義昭
〈日帰り利用〉
いろりの郷*
東京八王子ワイズメンズクラブ
早稲田大学芸術学校
青山学院大学体育会航空部
- 11月(49グループ、延一、二八三人)
法政大学教授 菅沢龍文
お茶の水女子大学留学生センター
中央大学教授 島田修一
桜美林大学教授 藤井良治
法政大学講師 伊藤 守
桜美林大学教授 永瀬順弘
中央大学教授 横湯園弘
青山学院大学青山キリスト教学生会
明治学院大学混声合唱グリーンリー
プス
早稲田大学教授 安在邦夫
明治学院大学教授 熊本一規
国際基督教大学ティベーターイン
グン サエティ
東京都立大学理学部
お茶の水女子大学IMAGE研究会
中央大学教授 福井千春
鉱物科学若手の会
- 12月(48グループ、延一、二〇六人)
武蔵大学教授 川島浩平
日本女子大学英文学科
早稲田大学教授 中村 清
東京外国語大学教授 今井昭夫
東京学芸大学教授 国分 充
法政大学教授 相田利雄
青山学院大学教授 栗林 世
一橋大学教授 山崎敏彦
中央大学中拓男ゼミ 蓼沼宏一
青山学院大学教授 関 英昭
中央大学教授 高田橋範充
高千穂大学助教 嘉瀬英昭

COL「ツインングによる国際化への積極的取り組み」
よひに、マレーシア留学生71名のみなさん!!

2004年2月17日から23日にかけて、合計71人のマレーシア留学生が常夏の国から厳寒の日本にやってきた。芝浦工業大学と拓殖大学を中心とした13大学が実施しているツインングプログラムにより、日本の大学の2年次に編入する学生たちで、4月に各大学に配属されるまでの約一ヵ月半を当ハウスで過ごす予定である。

このプログラムはマレーシア政府派遣の留学制度の一つで、日本政府の高等教育円借款により運営されている。マレーシア側の実施機関はMARA教育財団(YPMカレッジ)、日本側のコーディネーションを担当しているのは特定非営利活動法人アジア科学教育経済発展機構(Asia SEED)である。因みにこのプログラムは「ツインングによる国際化への積極的取り組み」として、2003年度特色ある大学教育支援プログラム(COI)にも採用されている。

1992年に開始された当プログラムは、1999年に第2フェーズが開始され、当大学セミナー・ハウスでの受け入れも今回が9回目となる。イスラームのハラール・フードを提供したり、トイレや風呂場も習慣の違いを考慮して特別アレンジにしたりと、多少の気遣いはあるが、異国の若者で賑わうこの時期は、当ハウス職員にとっても心む楽しい季節である。マレーシア留学生のみなさん、ご滞在が快適でありますよう。



これから3年間、頑張ります！(到着の朝)

留学生会館建設にご支援を —開館40周年記念募金のお願い—

皆様方のお力添えを賜っております当大学セミナー・ハウスは、昭和37（1962）年3月に財団法人としての設立が認可され、3年後の昭和40（1965）年7月に開館しました。平成17（2005）年7月には開館40周年を迎えます。

わが国で学ぶ留学生は、平成14年5月現在で約95,000人を超えましたが、そのうち公的宿舎への入居留学生数は約25,000人で、うち国・公・私立大学の留学生宿舎には約14,500人（全体の約15%）が入居しているに過ぎません。多摩地区の各大学でもますます留学生数が増加する傾向にあり、良質で低廉な宿舎を確保することは重要な課題となっております。

当ハウスでも、これまで日米・日韓などの学生レベルの国際交流集会や来日留学生・研究者のための日本研究プログラム、最近ではマレーシア留学生の長期滞在など各種の国際的な研修を受け入れてまいりました。こうした経験を踏まえつつ、留学生を支援する施設を建設し、当ハウスを利用する方はもちろんのこと、地域住民との日常的な国際交流の場を提供してまいりたいと存じます。

今日の厳しい経済状況につきましては承知しておりますが、前回の募金趣旨をより具体化し、継承する今回の事業計画にご理解賜り、何卒格別のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

- 募金目標：200,000千円
- 募金口数：個人一口5,000円・法人一口50,000円
- 募集期間：2003年7月1日から2005年6月30日
- 払込方法：郵便局または取扱銀行よりお振込ください。
- 免税措置：ご寄付は「特定公益増進法人」に対する寄付金として税金優遇措置が受けられます。

★募金に関するお問合せ：総務施設課 TEL：0426-76-8511 FAX：0426-76-1220
E-mail：info@seminarhouse.or.jp

平成16年度大学教員・職員セミナー開催予告

- ☆ 第41回大学教員セミナー 2004年 9月
- ☆ 第42回大学教員セミナー 2005年 2月
- ☆ 第9回大学職員セミナー 2004年 7月2日(金)～3日(土)
- ☆ 第10回大学職員セミナー 2004年 10月22日(金)～23日(土)
- ☆ 第11回大学職員セミナー 2005年 1月21日(金)～22日(土)

★セミナーに関するお問合わせ：企画広報課 TEL：0426-76-8532 FAX：0426-76-1220
E-mail：kikaku-koho@seminarhouse.or.jp

ホームページ：<http://www.seminarhouse.or.jp>

館長室から

今年も大学セミナー・ハウスの谷に見事な枝垂れ桜が咲く頃になりました。小生が理事長をお引き受けしてから4年が過ぎようとしています。経営的には当法人も企業会計原則を採用して改革を試み、3年連続して「黒字」となりました。これも皆様のご協力の賜と厚く御礼申し上げます。本年は、留学生会館の新設など将来に向けてさらに前進したいと考えておりますが、現在、そのための募金活動に困難を極めておりますので、免税措置付きでご寄付をいただける企業等をご紹介いただけましたら幸いです。

このニューズレターに示されていますように、このところ、ハウスのセミナーは大変好評です。講師の方々や参加者の皆様に感謝致しております。

なお、2002年2月より小生が2年余り館長を兼ねておりましたが、この4月1日より荻上絃一常務理事（前東京都立大学総長）が館長になれる予定です。荻上氏は、数学者であるばかりか、深い教養をお持ちのロマンチストであり、当ハウスの館長に大変ふさわしい方ですので、何卒よろしくお願い致します。

（中嶋嶺雄）